公條家集（翻刻）

伊藤　敬*
遠田　晤良**

ここに翻刻紹介した「公條家集」は「阿波国文庫」蔵印のある江戸期の写本である。上下二冊本で、上巻には部立類題歌を収め、下巻には定数歌を集めている。奥書等はなく、筆者や書写年代は詳らかでない。表紙左肩に題僉があり、公條家集上・下とそれぞれ墨書されている。内題はない。大きさは、二六・四×一八・八糎、袋綴で上巻は三八枚下巻は四三枚、一四行で題と歌一行書きのものである。破損等により判読に苦しむというところはほとんどない。

この「公條家集」を底本とし、他の一本をもって校合した。それは、底本と同じく「阿波国文庫」の蔵印をもつ江戸期の写本で、表紙左肩にじかに「称名院集」、第一枚目の最初に「称名院家集」という内題のある一冊本である。奥書はない。二六・六×一九・五糎、袋綴で九十六枚、十一行書きで題と歌を一行にして写している。内容は底本と変わらないが、所収歌数において十数首の、歌順においては十首ほどの相異がある。破損はほとんどないが、書写の依った原本自体に欠損が甚しかったらしく、空白にしている所が多い。小は一字分から大は一首全部まで、百三十数か所を数える。（底本はわずかの部分の空白のみで、数も十数か所である。）また、明らかに誤読誤写と思われるもの、脱字、かなの不統一などのことが、底本に比して甚しい。それらを検討してみると、漢字使用の差ともあわせ考えて、両者は身近な書写関係にないとみられる。ただ、底本よりも朱による書き入れが多く詠出年月や歌会名や他本をも参考にしたらしい注記のあるのが特色である。

収載歌数の差異は、次のとおりである。

部立類題集、底本　一〇一三首、イ本　一〇〇一首（底本にありてイ本にないもの十五首、イ本にありて底本にないもの三首）
定数歌集　底本　九五三首、イ本　九五〇首（底本にありてイ本にないもの四首、イ本にありて底本にないもの一首）

校合にあたっては、明らかに誤りとみられるものもそのままにし、イ本の字句を本文の該当か所に傍注の形で示しイと添えた。（くわしくは凡例参照）

両本ともに、現在は伊藤の蔵するものであるが、かつて（昭和二十七八年？）三重県上野市の沖森書肆より入手したものである。

翻刻の校合の作業は、遠田と伊藤とが協同して行なった。始め、上巻を遠田、下巻を伊藤が分担し、後に協議して統一をはかった。両人にとって翻刻は始めてのしごとであるため、手段や問題の処理において種々疎漏のあることと思われる。が、そのすべての責は伊藤にある。今後、この家集を基礎にして、公条の全歌集を編むことを願いとしている。大方の御批正御教示を仰ぐことができれば幸いである。

凡　例

底本の面目をそのままに伝えるように心がけたが、次の点について私意により改めたり加えたりすることをした。

一、仮名づかいは底本のままにして統一しなかった。
二、異体漢字、略体漢字はすべて現行の字体に改め、変体仮名やハ・ミ等のカタカナ文字もすべて現行のひらかな書きにした。（ただし書写上の参考となる文字で、この例に従わなかったのがいくつかある。）
三、みせ消ちは、書写上の筆の誤りと判断し、活字にあらわすことはしなかった。空白か所は［　］をもって示した。

四、イ本との校異は、本文の該当か所に傍書しこれをイの符号で示した。その際底本の字句に比し明らかに誤りと思われるものもすべてそのままに注記した。また、底本の漢字の読みが特殊で、イ本がかな書きの場合に、参考としてふりがなの体裁で付記した場合がある。朱の書入れは朱と注した。

五、群書類従所収の歌についても、参考として校異を注記した。これは（　）をもってかこみイ本と区別した。

六、歌の出入りや順の異同については各部類や定数歌の終りに注記した。

七、検索の便のため、部立類題集の部にのみ、各部立ごとの一連番号を付したが、ページやォウの記入はしなかった。題の排列や定数歌順がおのずと所在を示すと考えたからである。

公條家集 上

春

注（　）で示した傍注は、群書類従第百六十四（第十一輯）の千首和歌太神宮法楽中の、公条の歌との校異をあらわす。

一　歳暮立春
年の内はさすか日影もあさ熊の山をへたてゝ春そかすめる（太神）

二　元日立春
けふに明て春の光は久かたの雲井とみつの朝霞哉（をイ）

三　立春
出る日もけさたつ春に雪の中はまれなる年の光みすらん

四
やはた山春さへみつの衣手にうつる日影のかすみ初らん

五
大伴のみつの白波春たつや霞をかけて遠き浜松

六　社頭立春
やはらくる光のとかにたつ春や世も住よしの神の松かき

七　元日歌の中に
いや年のつもるや雪のけふにあけ今日くれあすの春を迎て

八　春従東来
吹くるも世のことふきにあゆの風枝をならさぬ春やみすらん

九　早春
あま小舟はつせ川浪うち出てこほりそうかふ春のこもり江

一〇　早春雪
朝霞はるのきるてふ衣手も猶白妙にそむる雪かな

一一
あさ衣かゝる寒けき山風に雪も霞も袖にしふきて

一二　氷解
氷とく奥の□河も雲の色に打出る浪の花のはつしほ

一三　子日
よゝかけて引しはいつの子日（太神）にてわかの松原色もかはらぬ（ちイ）（彩イ）

一四　朝霞
雪の色夜の間に消て朝日さす山はみとりにたつ霞哉

一五　江上霞
まつら舟ほり江を遠み立こめてかち音かすむ波のしつけさ

一六　海辺霞
うちなひき霞を色のわたつうみやみるめを波の底にふかめて

一七　初鶯
野も山も霞を春のふるすとやまた鶯の声こもるらん

一八　暁鶯
有明の月影消て鶯の声のにほひに霞む山かな

一九　朝鶯
朝戸明はおとろきぬへし呉竹のちかきさ枝に来なく鶯（天文三四五道通院八十四続歌イ朱）

二〇　竹裏鶯
色かへぬ竹のさ枝に八千種の声を春なる宿のうくひす　枝に（はイ）

二一　鶯是万春友
春日野や若なにいはふ心をも先しる友や春のうくひす（のイ）

二二　若菜
あしたつのすりかり衣袖はへて誰せり川に若なつむらん

二三
人めよりふる葉はかれぬ朝ことに若なつむ野ゝ雪寒くして（巣イ）

二四　原若菜
万代をいはふ心は松はらもおなしみとりにつむわかなかな（太神）

二五　沢若菜
里人もはる〳〵きてや八橋のあたりの沢に若なつむらん

二六　水郷若菜
見し雪も都のたつみしかそなき八十うち人もわかなつむらん（もイ）

二七　寄若菜祝言
春日山松のちとせも霞たつ野への若なの色にこもれる

二八　春雪
花のひも谷の氷のとけなから春の心のあは雪そふる（太神）

二九　残雪
かさなれるうへより消て春は今降そめし色にのこる雪哉（とけイ）

三〇
空寒み雪のみ友を松の戸は誰しるとなき春の山ふみ

三一
松のはの雫も落て山風のさゆるや残る雪の下柴

三二　杜残雪
下草のこまも心をもりの陰人もすさめぬ春のあは雪（太神）（の）

三三　野残雪
春日野ゝ雪はしのふの乱れあひて限りもしらす残る雪哉

三四　竹残雪
春きてもふるはなからにふりとちて竹もや雪をふかくみすらん

三五　雪消松緑
松かねの岩井の氷雪なから夏なき年の春のまゝなる（本イ朱）

三六　余寒
風さゆる春の霞の村消に又もえ出る野へのわか草

三七　余寒霜
今はとて一重ぬきをく衣をも又きさらきの霜の朝風

三八　暁余寒
よひのまの霞は消て山のはに猶有明の残る寒けさ（とイ）

三九 山居余寒
四〇 梅
四一 梅有色香
四二 野宿梅
四三 隣家梅
四四 薔梅
四五 梅薫袖
四六
四七 梅有佳色
四八 柳
四九
五〇
五一 柳糸新
五二 柳靡風
五三 河柳
五四 山家柳
五五 朝若草
五六 春草
五七 岡春草
五八 早蕨
五九 林下蕨
六〇 路早蕨
六一 春月
六二 ・
六三 春月幽
六四 都春曙
六五 名所春曙
六六
六七 夕春雨
六八 夜春雨

朝夕(太神)にむすひなれても山の井に春また浅き氷をそみる
住人の心とめよと梅かゝをうきよにしめて春風そふく
見しやその西こそ秋の紅葉ゝの枝より花も匂ふはる風
秋風にあれにしまゝの野への庵けふは身にしむ梅かゝそする
軒ちかく梅吹きちらす笛ならはふるきをおもふ声はやめてよ
ふりぬとも(太神)春(香イ)をたにとめよ梅花軒のしのふははらはてそみん(かイ)
折袖にとまれる物のととめえぬ心をくたく梅の下かせ
乙女子も此世の梅の花のかを天のは袖に春やしむらん
窓に今よみつる文を巻もては眠そさむる梅の下風
うちなひき野なる草木も梅花色こき時や春をわくらん
わたつうみの南の岸の玉柳まゆの光や北のうら波
柳原ふね行岸のあさみとりいつるも霞む末の白波
くり返し新桑まゆの青柳の糸もやなかき春をしるらん
としふかき朽木の柳わつかなるいとにかゝれる春風そふく
河風に絶す乱てちる露の玉藻もなひく青柳のかけ
露の身の心ならはす山風にをのれ乱る青柳のいと
木の下は朝きよめせし跡よりやまたちりはかりもゆる若草
末遠き野へのわかはの新草にやとりそめたる春の朝露
松かけの岡のやかたの雪まより秋風しるき蔦の若はへ
真柴こる岩もとわらひ折そへて[illegible](いとゝイ)隙なき春の山人
折からもかた山はやし下草を先やきすてき春の早蕨
うつろひし山路の菊は紫の塵にそ残る早の早蕨
春はたゝ霞そわきて浮雲は風をも待し秋のよの月
月ゆへは霞もさこそいとふらしくもる名たての老の涙を
みるか内に猶かすみけり空の月更行鐘も山をへたてゝ
九重は霞のうちの鐘の声花の外より明ほのゝそら
よし野山此明ほのゝいつとてか雪のふしのね花に匂へる
色ふかき松のみとりのときは山今一しほの春の曙
けさのまの雲間をたにも問人の絶て暮せる春雨の空
うらわかみむすほゝるらん草の上も枕にしるき雨の音哉

六九 野春雨
七〇 賭弓
七一
七二 帰雁
七三 帰雁遠
七四 野春駒
七五 野雉子
七六 野外雉子
七七 桜
七八 柳桜交枝
七九 桜柳交枝
八〇 待花
八一
八二 待花遅開
八三 栽花
八四 遙尋花
八五 初花
八六 花盛
八七 静見花
八八 折花
八九 花色映月
九〇 風前花
九一 花似雲
九二
九三 雨後花
九四 朝花
九五 依花日短
九六 春夜花
九七 花浮水
九八

山はみな霞はかりの春の雨野なる草木そ色はわきける
梓弓けふはひく手も舞の手もひたりみきにそあかすくれぬる(らせイ)
九重に春の霞も引弓のかけみぬ庭はともねをそしる
真葛はもたえすかへして秋風の行ゑ(末イ)はしるや春の雁かね
さほひめの遠山まゆのおもかけにけさや乱れてかへる(へイ)雁かね
あはれにもかすむ夕の広き野に静に立て駒そかくらめ
桜ちる(さくイ朱)交野の原にたつ雉子羽風も春は花の香そする
つま恋のよるの思ひも春の野のあした佗しく鳴きゝす哉
空たかき匂ひもしるく桜花咲よりかゝる峰のしら雲
鶯もまかへて梅の花かさを桜にぬふ(やぬふイ、ぬふやイ朱)青柳の糸
風吹はみたるゝ糸の青柳に枝かはす花そしつ心なき
(太神)まち(太神)つけてことしの花やいかゝみん忘れかたきはつきぬ物から
春寒き山に心ををきそめて(こと)いとしも花や猶またるらん
外のちる後とはかりにまたれつゝつれなき花やたれ(のイ)をしへけん
(太神)うへ(つイ)しうへつもとのあるしの情をは忘れてことし花はさかなん
尋ても我家桜さかぬまのほとは雲ゐのみよしのゝおく
しらすこのまつ咲花やちるも又うらみそむへき梢なるらん
さそへともつれなしとてやけさのまは花を恨の春の山かせ
ちるも猶音せぬ花をしつ心なくとはたれか恨はてたる
あたなりと色よりも猶枝ことにうつる心を花やみるらん
みるまゝに心つくしの木間(この身イ)とも月にいとはん花の色かは
更にまた空に立枝もさすはかり風よりうへにさそふ花哉
月のうへ(鬼空点イ朱)にかけても見はや光ある花一むらのけさの白雲
花さかり世はをしなへて空明雲(雲にイ)にくるゝは天つそらかも
雨はるゝ山のかひより明る夜のひかりも匂ふ花のしら雲
露にねし柳は髪も乱れけりあしたのかほの花そ色こき
ちらぬまに千世もへぬへし花の陰けふの盛のみる程そなき
花よいかにやみの現か春のよも夢はなか〳〵のこるにもみん(長閑イ)
しらあはも玉とひゝきて石はしる滝にそ花の光みえける
よるの雨の水増り行山川に風のとかなる花そ流るゝ

九九　河花
一〇〇　隣家花
一〇一　花留人
一〇二　花形見
一〇三　対月惜花
一〇四　惜落花
一〇五　春風花散
一〇六　落花如雪
一〇七　雨中花散
一〇八　庭上落花
一〇九　落花盆庭
一一〇　惜花不払庭
一一一　苔上落花
一一二　落花客稀
一一三　花纔残
一一四　残花薫風
一一五
一一六　深山花残
一一七　羇中花
一一八　花色春久
一一九　追年花珍
一二〇　花下言志
一二一　野遊
一二二　遊糸
一二三
一二四　天外遊糸
一二五　春日遅
一二六
一二七　三月三日
一二八　野菫菜

空に今吹風ならぬ川音もわきて身にしむ花の陰哉（蛇空真イ朱）
我うへぬ花こそあらめ中垣をとひかふ蝶の心へたつな
花さかりたゝけふのみと思ふまにちるをも又そ見捨かねぬる
かたみには外のちりなんと斗にをしへし花の陰もいつまて
春よいかに月と花とにしたひてん梢色なき有明の空
惜むにも花はちりけり吉野山手をさへてせく滝は有とも
桜花柳か枝にふくとなき春風なから猶そちりゆく
ふりいるや簾を捲てみる峰の雪はまちかき花の下風（春かせイ）
雨とふり雪と世にちる白雲の有てはてうき花の上の風（也イ）
庭はけさ散しく花にもえ出て草も梢のあらし吹けり
雪と見は心もとめしちる花の梢にゆるす庭の朝風（太神）
ちりぬとてはらはゝあやな花の色を忘草生る庭と社みめ
春の色の緑をふかみむす苔をあらふはかりの花の白波（もイ）
かくこそあれ世のましはりも一さかり花より後は八重葎して
老はたゝ後の春をもしら雪とふる木の花は色香すくなし
猶残る梢やいつく風の上にやとりをかへてにほふ花哉
ちりて又ねにかへる花と見し春の梢は風の何匂ふらん（わイ）
残りける花さへさひし春風にとはれぬしるき山のおく哉
もとめてもとふへき花に旅衣たちもとまらぬまをいかにせん（身イ）
九重にあくまて花のみつかきの世ゝのかさしと匂ふ花かも（をイ）（色か春かイ朱）
かさすにもかくれぬ老の年〳〵にあかすは花を折や尽さん（猶イ）
さま〳〵に思ふ物から桜花うつろふ色のかきり有けり
野へにして霞のもすそたな引も雲のかさしの山さくら哉
草もゆる野島か崎の永日にあまや釣する竿の糸遊
芦のやの里の春風くり返したかいとゆふを賤のをたまき（かイ）
みとりなる雲ゐはるかにくり返し日影もなかくあそふ糸遊
霞つゝ行ともみえぬ春の日や老せぬ門のひかり成らん
行末にまつことあらは暮ぬまをいとひもすへき春の日永さ
なへてけふ花咲桃の紅にふむあと青き野（校）への遠近（ぬ歟ぬイ）（太神）
ちりもせし野へのかくれの菫草木高き陰の花になさはや

一二九　苗代蛙
一三〇　款冬
一三一
一三二　款冬盛
一三三　河款冬
一三四　折藤
一三五　松藤
一三六
一三七　松間藤
一三八　水辺藤
一三九　水辺松藤
一四〇　暮春
一四一
一四二　暮春月
一四三
一四四
一四五　暮春花
一四六　暮春残花
一四七　暮春款冬
一四八　惜春不駐
一四九　残春
一五〇　三月尽
一五一　三月尽夕
一五二　春植物
一五三　春松
一五四　芦筝
一五五　春色浮水
一五六　春眺望
一五七　毎家有春
一五八　花のあるしも

なく蛙身をうき草にかくしてもねを社たえね水の苗代（ぬイ）
いつくそと春の行ゑを山吹にとへとこたへぬ色はかひなし
鐘ひゝき暮行春の山吹はたかしくまをも色にみすらん
咲をしも何いそきけん山吹のさかりとみれは春のくれぬる（とイ）
山吹の咲や川せのいて我を人なとかめそ折てかへらん（太神）
めもはるに見てはかひなし紫の色こき藤は折てかへらん（も）（太神）
かけそめし契りもふかし藤浪に浪の声ある松の下風
音たてゝ吹にもきえす紫の雲こそうつめ峰の松風（とイ）
空たかくこすかとみゆる藤なみの雫もしらぬ松の下陰
岩越えて音なき浪も立水のなかれあまたにさける藤なみ
池広みこほらぬ水を藤なみのかけてそにほふ松の木高さ（も歟イ朱）
引とむる袖のたくひに朝霞なをたちのこれ春の行空
過行も花の日数にいひなせはわきても春そあたに暮ぬる
かすむより春の光とみる影も今幾夜かは有明の月
行春は夢はかりなる名残とて霞むも月の短夜の空
春の色をしたふともみす宵のまの霞を尽す有明の月
とくおそき花をしみれは限有て暮行春は猶そあたなる
いかにみん暮行春の日数をもかそふはかりに残る花哉（そイ）（太神）
わかうへにこえ行春といひかほにをそくも花の咲る山吹（春イ）
谷風にとけし氷のなかれてはせかれぬ水とくるゝ春哉
したひみる藤山吹の一さかりちらすは春のくれしとそ思ふ
うつろふはたゝ花鳥のうへならて霞もけふに暮て行らん
鳥の行ふるすにとまる春ならは道しるへせよけふの夕暮
木間より花に霞て久方の光のとけきとりの声哉
時しらぬ松ともいはし浅みとり花のあたりの春の一入
浪こゆる入江に霞む芦のねの若はもいまた見えぬ春哉
色ふかき空の緑をうかへても水の心に春やあまれる
山越て千里をみれは浅みとり海をふかめて浦風そ吹
住人の心もはるの色なれや柳さくらの門をならへて
こてふのみまとふとは見し世中は花のあるしも夢のやとりに（もイ）

一五九 春虫

花うへにまとふ心はこてふをも我かとたとる夢の春哉

（底本二行余白）

一六〇 朝霞春のきるてふ衣手もなをしろたへにそむる雪哉
一六一 春の色は浅沢水の緑をもわかなにいつかつみはやさん
一六二 一さかりかきりある世をことはりにけふは見すてぬ花の下陰
一六三 打なひき霞を色のわたつ海やみるめをなみの底にふかめて
一六四 深山木に咲てましれる花のえに身を忘れてや我もかさゝむ
一六五 けさのまの雪まをたにもこぬ人の絶てくらせる春雨の空
一六六 見るまゝに猶かすみけらし空の月更行かねは山をへたてゝ
一六七 谷せはみふるすなからに久かたの春をはしらぬうくひすの声
一六八 かきりありて山もやちかき行末はふかき霞のむさしのゝ原
一六九 折袖にとまれる物ととかめえぬ心をくたくむめの下風
一七〇 ちりにけり盛をいつと告やらぬ色もかひなき山吹の花
一七一 ちる露の玉のひゝきも聞わかんをとなき風になひく青柳
一七二 をのつからのとかなる世は咲花の匂ひにこもる春の夕風
一七三 うつゝともおほえすむかふ花の陰こてふの夢もむすふはかりに
一七四 梅かえに同し匂ひや法の花年のこなたのけふにひらけて
一七五 ちりまかふ花の匂ひに猶そ思ふ千代のふる道ためしなしやは

注、イ本にない歌、七九・一六〇・一六五・一六六・一六九。
一〇四はイ本では一〇九の後。

夏

一 首夏 しけりもや程なかるらん木ゝの色うつろひやすき花のあとゝて
二 宮人の卯月の袖も榊はのかみさひにけるなつころも哉
三 蟬のはの衣手よりも猶うすくにほふ桜に残る春風
四 更衣 月草の色よりも猶花染の衣手かなしうつる日数は
五 花染の衣のひもの時しあれとかふるならひもおしき色哉
六 思はすもけさぬきかへて花のかをうつし心もなき袂哉
七 更衣惜春 花の陰をしたふにあかてたつことを猶やすからぬ衣かへかな

八 余花 今よりは風をいとはぬ夏衣花のうらみやふかく染まし
九 余花似春 山桜花こそ残れ一枝をけふのかつらに折やそへまし
一〇 残花薫風 きのふみし雲はさなから白かさね袖に残れる花の色哉 ※花歟イ朱春
一一 新樹 ちりて今根にかへる花と見し春の梢は風の何匂ふらん
一二 卯花 水鳥の青はの山の色そこき同じ上毛としけるころ哉
一三 光ありと先めにとまる卯花の花のさかりやあけほのゝ空
一四 卯花は八重津にもさはりなき秋の月すむ垣ほなりけり
一五 つゐによをうの花山におもへ□□雪のふるすは鶯そなく
一六 夏きてもまた三日のよは卯花の咲る光そ月に増れる
一七 暁卯花 卯花やつれなく見えむ名残猶有明の月の空に消なは
一八 夕卯花 うの花は月をもまたて我せこかへるさいそく色にさく也
一九 籬卯花 春過てまかきの外に夏秋をへたてゝ雪の咲る卯花
二〇 賀茂祭 所せくたつるみてくらかさり馬神もやいさむ加茂のみつ垣
二一 神祭 珍（太神）しきかりねの野への露けさをけふはあふひのうへにみせけり
二二 葵露 朝露のえたにかけてやあふひ草月のかつらの影残すらん
二三 祭後葵 あふひ草きのふの露の色もなし一夜かりねのねての朝けは
二四 傾心向日葵 永き日を猶あかすとやあふひ草夕かけしたふ心みすらん
二五 郭公 聞はけに竹をさくてふ声の色にいてしや雪の山ほとゝきす
二六 忍び音の涙やこよひ時鳥つゝみかねたるむら雨の空
二七 またるゝをわれはかほにてたか里に夜ふかくいそく山時鳥
二八 一声のうたかはしさは五月やみはれぬ雲間のほとゝきす哉
二九 時鳥とりの跡にもみたるへき世をしる人もなきてきかれよ
三〇 待えたる声のうちよりわりなくもかへるさいそく山ほとゝきす
三一 うたゝねの是は夢路の時鳥音信絶し後の一こゑ
三二 きかし猶老て名をかる耳なしの山時鳥鳴あかすとも
三三 心つくす我ともわかす時鳥またぬ人にもおなし一声
三四 ほとゝきすしのひははてし立ぬるゝ山の雫に袖しほる比（御点イ朱）
三五 待郭公 時鳥同し山路に契りてや待出る月の影もつれなき
三六 聞郭公 ほとゝきすから紅のふり出て鳴やふりせぬ声しのふらん
三七 ほとゝきす行ゑは天津はしたてゝ及はぬ雲に声もあやしき

三八 五月やみ空にまきれぬ時鳥いかてかふかき山路こゆらん
三九 待聞郭公 待えてはをのつからなるね覚にも聞やとおしきほとゝきす哉
四〇 うき雲にさはらぬ声や月よりも後にかひ有山ほとゝきす
四一 短夜に契りをかけは時鳥きかてやねなんあかつきの声
四二 暁聞郭公 つれなさやおなし心の時鳥月にかたらふありあけの空
四三 待客聞郭公 時鳥また空たかく有明の月を残して山ふかき声
四四 雲間郭公 ほとゝきすなくさめけりな今こんといひしはかりの人は音せて
四五 雨後郭公 ほとゝきす声の匂ひや咲花のしら雲かゝる山を出らん
四六 夕郭公 衣かと雲のはたてのぬきをうすみ声もたまらぬ時鳥哉
四七 郭公何方 晴て猶よを残さすは雨中にきかてやあけん山郭公
四八 郭公一声 さそふとて誰かは山に入相の声をこなたになく郭公
四九 海郭公 さたかなる道しるへせよ帰らんもそこと定めぬ山時鳥
五〇 海辺郭公 山彦もしるやしらすに時鳥半天たかき夜はの一こゑ
五一 古宅郭公 わたつうみのなきさをかけて拾ふてふ玉の声して鳴時鳥
五二 郭公稀 ほとゝきす涙そへてや過つらんさらてもほさぬあまの衣に
五三 惜郭公 ふりはてし宿ともいはす橘のちりはわすれぬほとゝきす哉
五四 早苗 時鳥したふ今はのみな月の雲のいつくに声のこさまし
五五 花ちりて茂る桜の影にさへ年にまれなる山ほとゝきす
五六 名残いかに恋わひぬとも時鳥鳴音空なる雲の遠かた
五七 早苗多 (太神)とり残すは草も見えす行水の早苗こす波露の涼しさ
五八 早苗とる田面をみれは夏山のかけをもひたす水の面哉
五九 さなへとる夕かけ涼し小山田の秋のほなみのかゝる波哉
六〇 菖蒲 民の戸の身はしもなから時の雨を空に祈てとるさなへ哉
六一 沼蒲 花にさくたねともなしに夏草の事滋き身を何にたくへむ
六二 橘 雨はるゝ山田の雲に乙女子かかくれあらはれ取さなへ哉
六三 庵橘 うへわたす田面をみれはは(本ノマヽ)る〳〵と早苗は水のみとり残して
六四 ふきすてしあやめのかれはをさの(本ノマヽ)ゝ□匂ひ残らぬ軒の下風
六五 かりとるをいつかとたにもしらぬまにしらす(あやめのいかゝわくらん)
六六 軒ちかき花立花の枝たれて露おもけなるむら雨のあと
六七 かりに住宿とはいはし橘のむかしに匂ふ香をしるへにて
六八 庵橘薫風 むかしをや誰も残さん立花のにほふあたりの諸人の袖
六九 庵橘挽薫 匂ふもやたか手枕の風ならんねくたれかみのくろき立花
七〇 簷庵橘 夕ま暮ねぬ夜の夢のむかしをも語るはかりに匂ふ立花
七一 橘薫枕 匂ひくる風吹絶て立花の枝おもけなる軒の立花
七二 五月雨 軒ちかみかたらふ夜半のとこよりの花に咲てや夢さますらん
七三 音たつる風ならなくに橘のにほひ涼しきさよの手枕
七四 ふりそめし空の色にてあしたをも暮をもわかぬ五月雨の雲
七五 五月雨に行人もなし雲うつむ峰のかけ橘朽やはてなん
七六 しけりあふ木ゝさへ木々の雲の枝にして天地わかぬ五月雨の比
七七 はるゝにもふるにもあらぬうき雲は身を半天に五月雨の比
七八 うき雲のみほさかのほる五月雨にいたらてしるき四方の川浪
七九 高根にはみさりし滝や五月雨になかれておつるふしの白雪
八〇 五月雨晴 雲のみか晴行今朝は五月雨の川辺の水もかつすみにけり
八一 五月雨のほとふる空に馴きつゝ今朝はまはゆき日の光哉
八二 杜五月雨 雲かゝる杜の下草しけりあひていとゝ木ふかき五月雨の比
八三 古宅五月雨 葎おふる軒はさしてもうち日さす光もなきを五月雨の比
八四 水鶏 夕ま暮入江もかゝる船はたをたゝくやいつれくゐな成らん
八五 夏月 短夜のかたふく月をなかむれは影見し水はなかりさりけり
八六 夏衣うらなく月は身にそそふ雲なへたてそ夜もみしかし
八七 月夜自涼 山のはの月もいつみの底清みむすはてむかふ影も涼しき
八八 名所夏月 宵なから夏とや月は高円の尾上の鹿よおしみてもなけ
八九 瞿麦 朝風も思ふ中にや朝夕にちりをもすへぬ床夏の花
九〇 朝またきたかひとりねし床夏に秋くるよひの露かをくらん
九一 心してしむるまかきは今更におひ出る竹のなてしこの花
九二 瞿麦勝衆花 たくへて霜の籬の菊やあらん花なき比の床夏の花
九三 夏草 (太神)はらはねは草のみ高き岡のへの小松のみとりそれとしもなし
九四 故郷は道も絶けり夏草のしけきにもにぬ人の面影
九五 風前夏草 浅ちはらしけるをみれはをく露も忍びはてたる風の色哉
九六 夏草露 (太神)夏のよは忍ひにをける露のまもふかくもみゆる草のうへ哉
九七 朝な〳〵をきもわたさぬ露の上に茂る草はの程はみへけり

九八　夏草滋
九九　島夏草
一〇〇　夏野の草（のイ）
一〇一　鵜川
一〇二　山陰鵜川
一〇三　鵜舟多
一〇四　照射
一〇五　螢
一〇六
一〇七
一〇八　雨中螢
一〇九　螢知夜
一一〇　水上螢
一一一　鵜川螢
一一二　螢火透簾
一一三　叢螢
一一四　草螢似露
一一五　晩夏螢
一一六　夕顔
一一七　蚊遣火
一一八
一一九　暁蚊遣火
一二〇　遠村蚊遣火
一二一　池上蓮
一二二　氷室
一二三　夕立
一二四

〈発空点イ朱ヨイ〉しけりあふ草はみなから忘草とふへき人の道もたへぬる
夏の日のなかき限りをみしま菅水のみとりもしけるかけ哉
夕されは夏野の草の下葉にも秋の物なる露やをくらむ
夕やみはほとなき月の桂川鵜舟のかゝりさしかへるなり
神代にもかくやは秋津島つ鳥うきなる浪に夜川たつらん
うかひ舟のほる高瀬や月くらく山あるかたにさして行らん
うかひ舟いつくか月のかつら川ほしの数〳〵かゝり火のかけ
あけぬなりともしの影も白妙の袖まきあけてかへるますらお
秋風の吹とも見えぬ半天にいかに乱るゝほたる成らん
ふかゝらて影なきほとの夕暮はたゝ夏むしのとふほたる哉
まよふへき心のやみもしらすとや夜の螢の身をてらすらん
おもひにはもゆとはかりの螢にも涙をそふるよひの雨哉
とふほたる夜のまの光ほの〳〵と明行空に消むとやする
風に消ぬおもひは絶す流行水にもえて飛螢かな（なかイ）
うふねさす波にみたれて行螢是も闇路を猶したふらん
行螢すたれうこかし秋風も吹いるはかり影の涼しさ
露ふかく下葉朽ぬる草むらをかれなてちかく飛ほたる哉（太神）
下草の朽葉にわきてをく露や螢と成て光みすらん
秋ちかく成行空の風の色を光にみせてとふほたるかな
板間もる露さへ涼しあかねさすひかきにこゆる夕貝の花
暮かたき夏の日影に夕をやいそくとみゆる里のかやり火
かやりたく道行ふりの煙さへやとうらめしき袖のうつり香
すくもたく煙もすみて更る夜に蚊の声かへる賤か家〳〵
かやりたくよのま程なき枕哉小笹かりふくしのゝめの宿
一村のほのかにみえて里人のすむとはかりやかやりたくらん
水清みさける蓮の花の露池の心もにこるとは見す
うち出る花をもしらぬ松杉のかこひもふかき氷室山かな（立もイ）（陰イ）
山風のたても涼しき松かけの氷のこもる室の戸口は
時のまにくれぬとみつる山のはに入日をかへす夕立の跡
夕立の過るもはやく一村の雲にのみふく風の音哉

一二五　遠夕立
一二六　蟬
一二七　山裏蟬声
一二八　杜蟬
一二九　社頭蟬（林イ）
一三〇　樹陰夏風
一三一　風の涼しく
一三二　納涼
一三三
一三四
一三五　夕納涼
一三六　山納涼
一三七　松下納涼
一三八　晩夏
一三九　夏祓
一四〇
一四一　瀬夏祓
一四二　貴賤夏祓
一四三　六月祓
一四四　夏杜
一四五　夏居所
一四六　夏鳥
一四七　夏香

一四八

（太神）あふきもて月ならは先まねきてん夕立すらし雲の涼しさ
あつき日になれてはしるや木かくれの夕露いそく蟬のは衣
山ふかみ秋よりさきに蟬のはのうす紅葉する露もおつらん
せみの声涼しくも有か風ふかぬ杜の木葉もうこく斗に
山風も涼しく落て日くらしの鳴音にゆつる杜のうつせみ
九重（太神）のみはし（まちかく）にちかくきく（空）蟬の羽の林をやとめて鳴らん
吹となき風の涼しき陰なれやそよくは秋（のイ）にならのはかしは
夕間暮風の涼しく吹空に待いてん（はイ）月の秋（彩イ）をしそ思ふ
涼しさを袖につゝみて帰みん岩にくたくる滝のしら玉
すゝしさは袖の上にもせきかけておとすはかりの庭の遣水
池涼し広葉かしはに風ためて清水かきやる山の岩陰
涼しさは月をもまたし夕やみの光をちらす木ゝの下かせ
岩ねふみかさなる雲に日の影も秋をやもらすみ山木のおく
あつき日は暮行年（イ）ほとを松の陰千世もへぬへき袖の涼しさ
みそきする暮の半の夕付日きへて涼しき跡の川風
更行は河風たかし御祓してけふ行年のなかは過ぬる
七瀬川あさにひかれて行水の心にくゝる夕はらへ哉
かそふれは年の半の瀬をはやみ御祓に遠き跡の白波
なへて世の程につけてはしらすそのうきせも有（あれイ）と御祓しつらん
諸人（太神）の千わきにわきて思ふ事けふみなつきにはらへはてて（ひイ）（いイ）てん
夏ふかき杜の梢の色もにすちるやいかなる下葉なるらん
夏の日の光もよそふみかさ山さして涼しき木陰をそ思ふ
うへわたす田面をわたる白鷺のかけよりすめる水の涼しさ
花にそむ人の心はあたものゝ此世の外とにほふ蓮は

（底本二行余白）

あかすのみ思ふやよひの月草の色もてかふる夏衣かな

一 立秋
二 三日月あけの月
三 秋来水辺
四 初秋
五 初秋月
六 早秋
七 新秋露
八 早涼
九 残暑
一〇 七夕
一一 庚申七夕
一二 七夕月
一三 七夕迎夜
一四 七夕契
一五 七夕桂（秋）
一六 七夕衣（糸）
一七 七夕帯
一八 七夕植物
一九 七夕草花
二〇 七夕木
二一 星河秋興
二二 星河落簷
二三 織女雲為衣
二四 織女風為扇
二五 織女惜暁
二六 織女惜別
二七 今宵織女渡天河
二八 代牛女述懐
二九 荻
三〇 荻風
三一 （秋風）
三二 萩
三三 萩露
三四 野萩
三五 女郎花露
三六 風前薄
三七 夕薄
三八 浅茅露重
三九 草花
四〇 折草花
四一 月照草花
四二 霧間野花
四三 小鷹狩
四四 露

秋

風も今秋たつ西の山のはに雲間涼しきありあけの月
立そむる雲の衣の秋風はよそなる露も身にやしむらん
うちよする浪をも先や行てみん都の秋の加茂の川風
秋よたゝ心にこめて忍ふへき露に先たつ荻の上かせ
しのゝめの空にかはれる風の音を枕よりしる秋の色かな
なへて世の風は音のみ月影のめにはさやかに秋をみせける
天川うかひそ出る月の舟あす出すへき瀬やならすらん
秋とけさいかなる風の吹かへすころもへすして身にはしむらん
いかなれや袖は草はにおらぬ身もけさ吹風の秋をしるらん
けさみれは桐の一葉の雨の音も名残有ける露の色かな
秋□先桐（はゞ）の一葉のうへとのみみれは身にしむ風のをと哉
秋きても水の白波立かへり猶わすられぬ夕すゝみ哉
鳥（太神）は猶羽をならふる空にしもほしの契りのいかにまれなる
あたにちる紅葉の橋も織女の年にまれなる色を待けり
ほし合の年のわたりはかはらめや三のあたたつ道もよそにて
織女の空にあふきの風ならて月にちりなきかさゝきの橋
天河中にありとも牛女の袖つくよはをえやはへたてん
かきりなき年のわたりの星合をいむてふやたゝ人の世の中
めくりくる一夜をとしになすらへは別はしらしほし合のそら
けふかくる牛女つめの玉かつら絶ぬを秋のちきりなるらん
千年ふる川せのたつも契けんむかしはしらしほし合の空
織女（太神）や天のかはらの岩枕ならふる夜半（秋）はかたき秋かな
たゝ一重また初秋のから衣かさねはうとしほし合の空
織女のをる手にかけてしらいとのなかに契（きイ）りやいく秋の空
待えても契りはけふのひたち帯かことはかりや星合の空
かたらひはなりもならすも七夕（のイ）はまれなる名のみあふ（おイ）の浦梨
年をへて名も久かたの月草にあらぬ契りやほし合のそら
初尾花くりいたす糸や七夕の年のをなかき手枕にせん
をく露をけふ七夕にかしは木の葉守の神も手向すらしも
秋にありて七夕つめをわたさすは名にもなかれし天河水
星合の夜や更ぬらん天河軒よりにしにかけてなかるゝ
雲をみな月にはかけし七夕のよるの衣にをりつくさなん
おさあらは衣にかへて立わたる雲をそきませほし合の空
七夕の閨（にイ）の色をは心してかさぬ扇を風やかすらん
初秋のあくるはやすの河原風身にしむ星の逢瀬をそ思ふ
別路の心ほそくも七夕のあかぬね（明櫻にイ）かひの糸によらなん
天河わたるときくにぬれ衣やけふの七日にほしあひの空
立わたる中のへたての天河年に一夜や浅瀬（わたせイ）なるらん
あた浪のあたにもたゝし天河年のわたりのけふの契りは
よにつもるとしをはいはし牛女は一夜のためにをくりむかへて（はイ）
さよふかき荻の上はの秋の風音せぬ露そ袖にあらそふ
ね覚（太神）して今より長き夜半の月見よとすゝむる荻の上かせ
折（太神）しけと風こそ絶すしほりけれ波□（のイ）音（さイ）そへいせの浜荻
いかなれやしほれぬ荻の風の音に桐の一葉の心よはさは
江（太神）の水にあらふと聞しから錦ほしあへぬ露や荻（秋）にみすらん
よるの露の光もありと故郷に萩の錦の袖かへるみゆ
玉にぬくためしはしらす萩の露おらてや風の心をもみん
夜もすから鹿なく野（ゝイ）への萩か花さそな涙の露もをくらん
白露は夜をかさねても女郎花はなの名たてに心をかれん
ほに出てなひくをみれは花薄人の袖まてつゆの秋風
夕日影かたふくまてを山鳥（にイ）の尾花か末になかめくらしつ
あさちはらなひくをみれは色ことにいかなる露のけさむすふらん
いかならん先色みゆる初尾花末葉の秋の露のたまくら
手折つる一枝をたにま萩原いかにをしかのしたひてかなく
下葉まて□□□の小萩をく露のふかく分入月の影かな
秋風の遠里小野の花のかも霞（務イ）より匂ふ袖（をイ）の上哉
ふみ分て入や野口のかり声に山もとさわく秋のむら鳥
袖をかる露は心に有物をよそけにぬるゝ草の上哉

六五 袖ならてかゝらんかたも七十にあまりて消ぬ露も□なし
六〇 竹露 うちはらふ菊のうへなるためしとや千世もへぬへき竹の下露
六一 虫 思ひ残すこともあらしの吹すさふ野原をむしの所えてなく
六二 虫声怨 虫の声きけは露けしさよ枕床は草はの野へはひとつに
六三 虫声怨 から衣秋の夜寒のうらみをも思はぬたれにむしの鳴らん
六四 雨夜虫 野へは今はたをる虫の夜の雨にひもとく花のにしきをや思ふ
六五 夕虫 色〳〵にひもとく花の夕露に声にみたれてむしの鳴らん
六六 秋はたゝ草はの虫の声たてゝ夕日かたふく山の下かせ
六七 野虫 野への色はまた霜をかぬ秋風にわか床遠きむしの声哉
六八 松虫の音そ たのめをく人こそしらね更るよを松虫の音そうらみかほなる
六九 秋風 草も木もともにそなひくをしなへて夏と風とに秋や立らん
七〇 みるまゝに寒きみ空の秋の風さゆる声なき雲そ身にしむ
七一 鹿 山ふかみ世を秋風に鳴しかはかなき夢をいかにとふらん
七二 聞鹿 鹿の音におとろかされて秋風の外にもおつる袖の露哉
七三 鹿声幽 きけは猶山かすか也鳴鹿のまよふこゝろの雲霧の空
七四 鹿声稀 かり残す稲葉一むら霜をきて岡への道はさをしかのあと
七五 秋夕 身のうさを思ひ捨たるいつくにかさてもなかめん秋の夕暮
七六 浦秋夕 うき秋の夕の波のうへにたになかめかさねてかへるつり舟
七七 秋夕情 なかめわひ立出ん空も夕霧のはれぬおもひは行方もなし
七八 駒迎 神垣に年ふる駒もむかへてしその望月の秋は忘れし
七九 稲妻 空にみつるたか思ひをか村雲のつゝみかねたる稲つまの影
八〇 風あらき雲の絶まの稲妻にありとこたへむ露もはかなし
八一 いなつまの影もわりなし夕間暮たか手をかへす雲の行ゑそ
八二 風わたる山田の沢の花薄まねけはまねくよひのいな妻
八三 山もとの田面はるかに風さわき村雲まよふ秋のいなつま
八四 つれもなき岡への松の風の音をいなはにくたく露の色かな
八五 秋田 かたよりに見えしほなみは皆ふしてひとりいねかての小田の小莚
八六 秋夜夢 秋そよきすゑを見はやと思ふ夢にわさとぬるよはなかくね覚て
八七 月 幾里の物おもふ袖のなくさめも月はひとりの秋かせのそら
八八 野へはみなちくさなからに影やとす月もや露の種をまきけん
八九 見月 雲は猶うきたる物そ月は世に身をかくすへき宿なたつねそ
九〇 あきらけき此九重に影しけは月の都をならへてそみる
九一 独対月 思ひ出ることをあまたに空の月ひとりみるこそ友は有けれ
九二 貴賤憐月 おもふ事心〳〵の身のほとにむかふかうちの月もはつかし
九三 十五夜月 富士のねの雪ふりかはるけふをしも秋にかそへて月もみつらん
九四 八月十五夜 まきあけて終夜みん玉たれのこかめをなかの秋の月影
九五 むかしにも光そこえむ秋をへて名をかさね行けふの月影
九六 ほし合の過ても秋の名に高き月こそわたれ天の川浪
九七 廿日月 夏のうちは花に色こき深見草はつかの露は月や待けん
九八 在明月 名残をも誰おもふへき空ならん尾上のかねに在明のかけ
九九 九月十三夜 風わたり初霜さむし秋の月後のこよひのまへのたなはし
一〇〇 月前風 花やさく袖こそ匂へ月の中のかつらをいつるあきのさよ風
一〇一 山月 半天の雲もかゝるや夕暮の月待ほとはたかき山の端
一〇二 月出山 山ふかし水上清き水の音にまち出る月の影も澄けり
一〇三 嶺月 心あての岑の松風吹そひていつるもしるき月のさやけさ
一〇四 月前雲 月すめは何をふくともしら雲の残るかたなき四方の秋風
一〇五 峰上月 雁のくる峰やいつくと暮にたつ霧にまかはぬ月も出けり
一〇六 野月 雨露をおほふとはみすかけあさき野守か庵のよはの月哉
一〇七 関月 旅人も猶いねかての空なれや関ふきこゆる月のさよ風
一〇八 橋月 天地のさかひもしらぬ板はしの下行水も月をうかへて
一〇九 滝川 山風の声すみのほる月影によるとはみえぬたきの白いと
一一〇 海月 心なきわさとはいはしうちはへて月をみるよのあまのたくなは
一一一 湖月 月はたゝそこのみるめもなきさよりにほてる波に舟うけてみん
一一二 浦月 あま小舟よるへさためぬ浦風に月もとまらぬ波のうへ哉
一一三 花洛月 山のはをはなれてのほる空の月光を花の都にやすむ
一一四 古寺月 嶺高き月の桂にならふ木の軒こそ秋をひかりなりけれ
一一五 庭月 あふくなりかきねのうちも海山をうつせる月の光あまねき
一一六 岡竹月 くれ竹のよはなか岡の秋風に故郷さむく月そふけゆく
一一七 松月幽 人はいさ月は見るやとことゝはんかけとしもなき松の下みち
一一八 月前遍舟 影も入つなきはとめす行月にまかせていつるあきの舟人

一二九 月似心
一三〇 月不如秋
一三一 残月
一三二 惜月
一三三 雁
一三四 初雁連雲
一三五 霧
一三六
一三七
一三八 暁霧
一三九 夕霧
一四〇 河霧未晴
一四一
一四二 霧隔舟
一四三 擣衣
一四四
一四五
一四六
一四七 擣衣幽
一四八 擣衣到暁
一四九 擣衣欲曙
一五〇 鴫
一五一
一五二 月前鴫
一五三 沢畔鳴
一五四 鶉
一五五 夕鶉
一五六
一五七 葛風
一五八 野分

月かけはをく露ことにうつりけり人のこゝろをいかゝさためん
春秋をならへていはゝ花よりも月はもみちや照まさるらん
秋の夜のなかきあはれの名残とて猶かきりなき月の影哉
珠洲の海やよをなかはま□なかめても名残はつきぬ月の明方
一むらの雲もしくれて行雁の涙やしはし空に残れる
見よ(大神)や此今朝くるからに雁かねもつら翅をみたらぬ雲の上哉
みるまゝにおほつかなしや夕霧の色より暮る秋の山もと
朝ほらけ千里の波のうき草や霧にうかへる梢なるらん
白たへの色とも見えす朝まだき音きく水の霧に埋れて
雁のくる嶺の横雲それとたに立もわかれぬ秋霧の空
分る野の草木もしめる秋霧にあらそひけりな袖の夕露
夕霧のいさよふ波に今朝は猶せかれてくらき瀬々の網代木
水の上にあらはれぬへきさほ山の錦よふかき今朝の川霧
声(大神)かはす我友舟も霧のうちのあらふ波まのしまかくれ行
袖(声も)にのみをくと思ひし秋の霜うつや衣のうへに寒けき
身にしめとうつや衣のうらみても思ひくまなきよな〳〵の声
高円の尾上の小萩うらかれて秋風寒く衣うつらん
月草の花田の衣うつたへに秋そうつろふ蓬生の宿
陰高き松(大神)より落ちて荻に吹風のたえ〳〵衣うつ声
打音におとろかされて暁のねやの衣やさらにかさねん
名残とて明るそおしき折しもあれ心にやつす衣うつ空
明わたる秋の沢水霧晴て鳴の百羽も音そさやけき
月見てもすみかたきよのうき数を鳴の羽かきかきそそへける
うちもねす月に物おもふ小莚に我かたしきの鳴の羽かき
なかるゝもしつかにすめる沢水に鳴の羽音のひとりさひしき
深草の里はあれにし秋寒み鶉そひとり床しめてなく
秋の霜むすはん草にふす鶉衣ありとも床なたのみそ
深草や春見し花もすみ染の夕の野へにうつら鳴なり
なかきよを猶(秋)くり返しけさたにも風吹たえぬ葛のはかつら
夜半にねし(せゝ)野分うらむる村雨に朝風かこつ庭の松むし

一五九 九月九日
一六〇 重陽
一六一
一六二 菊
一六三 黄菊泛觴
一六四 菊有新花
一六五 新菊有余芳
一六六 菊有傲霜枝
一六七 菊露
一六八 山路菊
一六九 河辺菊花
一七〇 園深菊更栄
一七一 籬菊
一七二 籬菊新綻
一七三
一七四 秋菊盈枝
一七五 菊叢競芳
一七六 終日翫菊
一七七
一七八 菊独秋花
一七九
一八〇 菊有長生種
一八一 菊是頻齢薬
一八二 蔦懸松
一八三 黄葉
一八四 紅葉
一八五 尋紅葉
一八六 初紅葉
一八七
一八八 紅葉浅

天つ星の光にちかき山たかみのほりてむかふ菊の盃
菊や今なへての花の七重八重九重のいろにさくらむ
君か代の秋や幾秋菊の露けふ九の淵をかさねむ
霜の色に月光もさしそふや夜ふかくみゆる庭の白菊
菊の上にけさをく霜をもちなから千世もめつらん花の盃
うつろふを見しはまちかき色にしてけふめつらしき花の白菊
けさ咲や露はまかきのあつまやのまやのあまりにほふ白菊
百花の枝野分をよそにおむらし(ホノマヽ)もひとつ心にしものしら菊
星かとそあやまたれける花の上に天つしつくはけさそ置らし
分きつゝこゝそ仙人のをのゝえも朽葉色こき菊の上の露
見つゝきくあやまたれける白妙に袖ふる川の浪やかくらん
けさそみる暁いりし園のうちは雪もさなから匂ふしらきく
白妙の袖まちわたる菊咲て草のまかきは誰をへたてむ
秋の菊千年をここに咲そめて山路へたてぬ笆ならなん
菊咲て庭も笆も千年ふる山路の露のひかりをそみる
仙人の袖ふりし枝や三千年のもゝてふ花のけふに匂へる
咲ましる千種なからの色も哉香(もイ)菊をひとりのけふの秋風
菊はけさをきまとはせる秋の霜とくる夕の露もはらはし
あひにあひて咲白きくの花の上にけふは日影の長月も哉
うつろはゝ木葉もたくひ有ぬへしけふそひとりの花の白菊
春の花外のちりなん後そこのいさめをきくや秋に咲らん
咲いつる色はさなから月の中のくすりやたねの白菊の花
月の中にかくす薬もお□とせの袖にうつしてにほふ白きく
蔦のはのかゝるをみれは松にたにいたつならぬ露時雨かな
うす(大神)紅葉時雨に染てあかねさす日影をよその色やわくらん
よはにたれしらてこえけん立田山錦はけさそ嶺の紅葉ゝ
うつり行時雨のあとの山めくり先一しほのもみちをそみる
露時(大神)雨松のあたりやそめあへぬ色もめにたつ木々の紅葉ゝ
秋ふかき心の色の初時雨そむる梢にいそくもみちは
柞原梢ほのめく夕日影また入たゝぬ秋の色かな

一七九 山紅葉
さよ時雨そめつくしたる紅葉ゝに残る雲なき山風そふく

一八〇 深山紅葉
紅葉ゝや山に住人山にても猶おくふかき色をみるらん

一八一 杜紅葉
よそにみる梢色つく杜の露下葉は今や染はてぬらん

一八二 河紅葉
遠さかり行手の紅葉かへりみて杜のしめ縄ひく心かな

一八三 紅葉透松
河のせになひく玉もゝ紅葉ゝの下にかくるゝ水の色かな

一八四 惜秋
紅葉ゝに今一しほの色なれやくれなゐくゝる松の緑は

一八五 鐘声送秋
朝露のおき出てより夕霧に立もとまらぬ秋をしそ思ふ

一八六 暮秋
吹そめし風もそなたの西なるや豊等の鐘に秋は暮けり

一八七 暮秋霧
かたみとて我身にとまる秋の色はふかく成行夜寒也けり

一八八 九月尽
けふのみと霧立わたり暮る日の秋の名残に明すもあらなん

一八九 九月尽
したへとも秋の行ゑにしら露の玉のを長き長月もなし

一九〇
風なから西よりそめし秋なれは入日やかへる所なるらん

一九一 商律欲尽
紅葉ちり秋暮かたの山風に千年の松のあらはれそ行

一九二 秋暁
涼しくも秋くるにしの山のはにあらまほしきは有明の月

一九三 秋岡
日影さす松に朝露しけく落てともに乱るゝ岡のかるかや

一九四 山家秋深
かこひをく岩垣紅葉秋ふかみ照日もしらすうちしくれつゝ

一九五 秋色
いかにしてあゐよりも猶青葉をも又色かへて秋はそむらん

一九六 秋に心を
誰も此秋にこゝろを置露のきえむ行ゑをしらぬはかなさ

注、イ本にない歌、一五五。イ本にありて底本にない歌、九八、九九。
イ本では一〇四は一〇〇の後、一三四は一三六の後。

冬

一 初冬
（太神）いつよりか身にはならさん昨日けふけしきはかりにひらく炉火

二
秋に先いつれしほれし草木ともとはゝやけさの嵐ふく空

三
ちりはてぬ菊も紅葉も色かへすきのふの雲をしたふ色哉

四
今朝は世にしくれ□して空に立雲こそ冬のはしめ也けれ

五 時雨
吹はらふ空とはみへす浮雲を風のうへなるむら時雨かな

六
秋を思ふきのふの袖はかはかぬに時雨にきほふ冬の色哉

七
さためなくうきたつ雲もよそならて我身世にふる村時雨哉

八
木葉ふり雲はまちかく行かへり天つ空なき時雨とそみる

九
夕時雨ふるやゆつきか下露もこほりて落る冬の山かせ

一〇
色かはる冬の草木のよそなから雲さへもろくふる時雨哉

一一 時雨晴陰
雲風の空さためなく晴またに木葉にみえてふる時雨哉

一二 夕時雨
木葉には時雨つくして夕日影うつろふ山に残るむら雲

一三 山路時雨
朝日影夕ゐる雲にかはるまて時雨てわたる嶺の梯

一四 枕上時雨
一とをりふるかと聞し枕より跡よりはれて行しくれかな

一五 落葉
（太神）山風（の）に空は時雨の晴てたに落葉くもれる木かくれの道

一六
木葉ちる嵐の末は山水もこゝに落くるさよの手枕

一七
つもるをや又吹かへす夜嵐の落葉色なる庭の朝霜

一八
雲風もきほふ木葉の露霜にほすまもしらぬ山の下道

一九
はては又嵐をそめて行木のは時雨て雲にかへす色かな

二〇 葉落月明
うき雲の下てる紅葉ちりはてゝ月の光に山風そふく

二一 風払落葉
吹風はよその紅葉もとめしとや松のうへなる朝きよめ哉

二二 落葉交雨
秋のうちにそめし心の程みえて雨をはなれすちる木葉哉

二三 落葉深
（太神）ちりひちのなれる山をも木からしの跡につもれる落葉にそしる

二四 橋下落葉
行人のあとみし橋の霜の上も又や木のはのとめかへすらん

二五 谷残菊
冬まてもうち出し浪や谷風の花をときはに残る白きく

二六 霜
雲かゝる外山を出るかねの音もをく初霜に夜は更にけり

二七
うつの山夕霜はらふ松風に蔦の枯葉は猶残りけり

二八
下草もみな埋れて降そむる雪はつかしき松の霜かな

二九 朝霜
（太神）行かよふ人よりさきにおき出る鳥のあとのみふかき霜哉

三〇 寒草霜
（夜）あけてみん我うちとけてふしかぬる夜寒はさゝの霜ふかき

三一 行路霜
あつさ弓八十のちまたも一すちの跡みぬ霜の朝ほらけ哉

三二 霜夜鶴
よをへては松の葉寒くをく霜の色に出たるあしたつの声

三三 寒草
霜散し尾花の波の末葉まて氷はてたる霜の寒けさ

三四
高萱にかくれし岡の小松原冬枯てこそあらはれにけれ

三五
打なひき霜にしほるゝ冬草の下葉やしはし枯残るらん

三六 寒草少
ふかゝらぬ霜もや埋む冬草の有にもあらぬ庭の寒けさ

三七 庭寒草
雪はいさ草はゝ枯て道もありとつけはや人に庭の朝霜

三八 垣根寒草
あらはなる垣ねを思ふ葛かつら心なかくものこる寒けさ

三九 江寒芦
四〇
四一 寒芦満江
四二 氷
四三 氷不解
四四 橋下氷
四五 湖氷
四六 冬月
四七
四八 冬山月
四九 寒夜月
五〇 寒夜重衾
五一 千鳥
五二
五三
五四
五五 暁千鳥
五六 千鳥暁鳴
五七 薄暮千鳥
五八 深夜千鳥
五九 湖千鳥
六〇 潟千鳥
六一 水鳥
六二
六三 沢水鳥
六四 淵水鳥
六五 葦間水鳥
六六 網代

夜をかさね入江の風もかれ〳〵の氷にとつるあしのむら立
海人の住里のへたての芦のはも枯て入江の水のはるけさ
おれふすや芦の枯葉におほはれて入江は舟のよる水もなし
吹はらふ夜の間の風や氷らん波のあやなき池の面かな
氷りけり乱て見えし白糸をむすひとめてや音なしの滝
行水にうきてたゝよふ柴橋もけさは氷のかけやすむらん
氷とち沖津島山空寒み春にあふみのうみのはるけさ
身にちかくなれん物かは夜嵐の木間さひしくさゆる月影
今はゝや時雨つくして雲もなくなきたる月はたゝ冬の空
行水の音は氷の山風もまきの戸寒き月をみる哉
小夜風の氷をわひて鳴をしのかはらも月に霜の花咲
重ねても猶かさねはや霜雪のふかきにたへぬ夜の衾は
ひとりのみ浦つたひきてから崎の松にともなふさよちとり哉
なきぬなりあまのとわたるさよ千鳥猶明やらぬ空を恨て
よふとてもいくその友かあはれまた雲かくれなく小夜ちとり哉
里のあまの竹のあみ戸の芦垣もうきふししるく鳴千鳥哉
わかの浦のまさこの数と年ふりてよみたにふかぬ浜千鳥哉
かたしきの衣手寒きさよ千鳥幾夜ねさめのつまと成らん
さよちとり夕付鳥に天の戸の明るもしるく声あはす也
磯の松たつきもしらぬ夕汐におほつかなくも鳴ちとり哉
君か代を八千世とつくるさよ千鳥明やらぬ空をしたひてや鳴
志かの浦や波は氷の松風にひとりしほれす鳴千鳥哉
暁のしほのひかたのしらむより千鳥も波にわかれてやゆく
うはけをは霜にもさそなをし鳥の羽風寒けき暁の声
をし鳥のをのかつかひも池水をさらぬかゝみや氷なるらん
氷ゐてうかふ瀬もなし水鳥の上毛の霜の花やちるらん
日くるれは山風さゆる沢水のうきねわひたるをし鴨の声
浅き瀬やはや氷るらん山川の淵を夜床の水鳥の声
なかれ芦のよをあしかものあかしかねおきゐる霜に声の寒けさ
あたりまて氷はてたる川風によりくる波はひをそ有ける

六九
七〇
七一
七二 霰
七三
七四
七五 野霰
七六 橋霰
七七 初雪
七八
七九 水路新雪
八〇 雪
八一
八二 浅雪
八三 深雪
八四
八五 雪似白雲
八六 朝雪
八七 遠山雪
八八
八九
九〇 遠岑雪
九一 峰樹深雪
九二 野雪
九三 行路雪
九四 山路雪
九五 河辺雪
九六 禁庭雪
九七 山家雪朝
九八 松雪

あかねさすけふをもさらによる波のかけひたすての網代守らん
うち川やあしろの［　］のうちはへて水底しろくやとる月影
宮人か月の桂のかけの枝おりしく波にあしろうつ声
秋かせに玉まく葛は枯はてゝあられ乱るゝ野への寒けさ
あられちる朽葉かうへのおもかけやみぬさ手向し杜の柏木
玉さゝの葉分の霜にくたけても消ぬを冬とちるあられ哉
玉あられふるえのま萩打みたれ露よりもろき野への夕かせ
ぬきみたる玉の緒絶の橋の上に夕暮かけてちる霰哉
けぬかうへにつもるはいかに山里はまつ初雪に道やはらはん
雪のまは時雨し庭の木枯に氷てさゆる有明のつき
つもるへき物とも見えすさほの行手にかゝるけさの初雪
今朝そみる高根の雪はよもすから風の吹しく四方の白雲
立つゝく朝けの煙吹まくも千里の雪にくもる山かせ
しはしとて遠方人の心をも待みん物かけさのはつ雪
谷川や猶かけふかく氷るらんつもりかさなる嶺の白雪
はらひあへす春より外に跡つけん友をもまたぬ雪の上哉
ふる雪の色とはみれと白妙の雲や氷りて行方もなし
夜のほとはふりかさねてもおき出るけさより雪は光そひけれ
今朝みれは何かしのたけ何かしの山をも雪のちかくなしたる
むら〳〵に時雨し雲の行ゑとや都はうすき嶺のしら雪
花のみか山のかひより白雲のかゝるとみるも雪そ積れる
嶺高み都の外になかめやるたもとも寒き雪の色哉
雪は今朝つもりはてつゝ嶺に生る松に聞へき風たにもなし
見し秋の野へのあはれのふかさをは降も埋まぬけさの初雪
あつさ弓八十のちまたも一筋の跡みぬ雪の朝ほらけ哉
夕ま暮あすの道をもうちわひぬ雪のふかきにかへる山人
ふくわくる跡かとみえて山川の水一筋に雪そ残れる
夜を寒み衛士の焼火は影消て雪の光や明ほのゝ空
とふ人をまつの嵐も吹絶て雪に明ぬる山のさひしさ
かきくらす尾上の嵐波こえて松にはれたる雪の遠島

九九　雪中見松
一〇〇　松雪祝（イ榜）
一〇一
一〇二　雪埋松
一〇三　桧雪
一〇四　雪朝遠樹
一〇五　雪中待人
一〇六　雪中客来
一〇七　雪中望
一〇八　雪中興遊
一〇九　野行幸
一一〇　鷹狩
一一一　夕鷹狩
一一二　狩場霙
一一三　狩場欲暮
一一四　炭竈
一一五
一一六
一一七　遠炭竈
一一八　寒夜埋火
一一九　深夜埋火
一二〇　炉火
一二一　寒夜炉火
一二二　向炉火
一二三　神楽
一二四
一二五
一二六
一二七
一二八

消る日を若菜つむ野に待やせんけさそみ山の松の薄雪
をのれのみおきかへる程をまつのはにはらはぬ庭の雪の木高さ
ふりつけとよそにはうすく嶺の松子日せしのゝあは雪の空
をしなへて降つむ雪は高砂の松もときはの色ならなくに
〈発空点イ朱〉夜嵐に時雨し雲をまきもくの桧原のおくの雪にみる哉
あすや又高根の色にましりなんふもとの松のけさの薄雪
見せはやと人を待まにけふも又はらはぬ松の雪おれの声
山かけのあとを訪ねは雪の中にとひくる人をいかにとゝめん
いく里の心の色もみえつへし月をそへたる雪のひかりに
誰をまたとふとはなしに思ふとち船さしてみんけさの白雪
たまさかの御幸はしるや村鳥のかけをならひの岡の池水
かりくらしけふはかりともおもほえす名残おほかる鳥の落草
狩暮し今はねくらに帰るらんとたちもみへぬ野への寒けさ
鳥のあとも雪とつもらはみゆへきにみそれにくらす狩衣哉
野への霜しらふの鷹を手にすへてまきれし物を日は暮ぬとも
炭かまの煙さひしき夕月夜はらふはかりの風もふかなん
焼はつる真木の炭かまぬりこめて煙絶行山の淋しさ
枝はつる翁のかみの白すみも横山風の雪の下みち（本ノマヽ、イ朱）
〈発空点イ朱〉よそにみるしるへ成へき煙さへあらす成ゆく峰の炭かま（たにイ）
いかにねん更行まゝに寒きよの嵐に消る埋火のもと
ねや寒みねられぬまゝに夜をふかくおこして向ふ埋火のかけ
炭かまの煙を春の霞そと見しは冬なき埋火のもと
寒き夜はあるかなきかに埋みをく灰の下なるおきあかしぬる
雲の上の恵忘れて今は身の火櫃もよその埋火のもと（ハイ）
更にけり吹よる風も榊はに霜置そふる笛竹の声（ハイ）
影しめり庭火ほのかに明るよに嶺の榊も霜や置らん（葉イ）
小夜ふかき月影なから空ははや朝くらうたふ声のさやけさ
更わたるよるの庭火は影しめり光そへたるあかほしの声
雲ゐまて庭火もしろし月の中の宮人さへや袖かへすらん
ひくことそやまとにはあらぬから〔　〕（きぬ駅・袖イ）を肩にとりかけ袖返すらん（也イ）

一二九　杜神楽
一三〇　仏名
一三一
一三二　年内梅
一三三　年欲暮
一三四　歳暮
一三五
一三六
一三七
一三八　歳暮雪
一三九
一四〇　歳暮迫
一四一　歳暮恣
一四二　都鄙歳暮
一四三　雪与歳深
一四四　除夜
一四五　冬夕

注、イ本にない歌、五七。

をく霜の杜の下風吹そへて身にしみかへる榊葉の声
となふるや仏もよゝに過にける其名をしたふ年の暮哉
つくりけるつみも仏のみなからに雪よりも先消（さきイ）やはつらん
春きてもあまきる雪のふる年のけふをや見まし梅の初花（よイ）
大かたに月をも日をもかそへしも此一とせの暮そはかなき
身のうへにつもらぬ年の暮ならはさのみおしまて春を迎む（太神）
かきりある春をいそかん年の暮身におしむとていふかひもなし
たちゐにもやすからぬ老の世をしらて暮行年の何とあしとき
身の上に秋の思ひもつもりきぬあはれことしのけふの夕暮
待出ん春の光も身につもる雪まはいさやおしき年かな
雪は猶ちりかひくもれおしめとも暮行年の道の行末
有明のみる程もなき光哉あはれことしの末のしらくも
行かへりうるはしれたる市人の心をしるも年の暮かな
つもりそふ道を思へは雪ふかきこしちは先や年のくれなん
山高みいくよの松のふかみとりつもれる年をうつむ雪かな（こ）
行年をよすからあかすまもるとは関越る春も空に知らん（太神）（松）
夜のまにはいかゝつもらんさえくらす嵐の末の嶺の初雪

恋

一　恋
二　初恋
三
四
五
六　忍不言恋
七　洩始恋
八　忍恋
九

きぬの〳〵袖の氷をしりかほに有明の空にをしそなくなる
いかならん行ゐはかねてしら糸の乱れそめたるけふはかなしも
今よりや浪こさしとのためしをも子日に契る末の松山（ハイ）
煙たて焼とも秋の初しほのうらみにたへぬ島のあま人（にはイ）
うたゝねの袂の露に折結ふ枕まてとはおもひかけすも
いとはれん身をしりてこそつゝみつれ我とひとしき心つくまて
春の夜の雲まをわたる月影のかすめていはんことのはもなし
身をしれは涙もさそなをさりに思ふ絶まにもりや初けん（太神）（のイ）
何かその人にもらさん我身たにわれにもあらす思ひ初てき

一〇 世にもれは又いひなさん方なきを心ひとつにとひこたへつゝ
一一 袖の上に落ともしらし中〳〵におさへは人のなみたとやせん
一二 忍久恋 なからへて我そひさしの軒に生る草はなりとも露も乱れし
一三 久忍恋 朽てたにかけひの竹のよをへつゝもらさぬ水の心しりきや
一四 忍涙恋 いひ出ぬ心もしらて思ふより外なるものともるなみた哉
一五 忍経年恋 しらせはや心の杉の年をへてそめんともせぬ袖のしくれを
一六 いくとせをふるの滝波音きくを袖のなかにはいかてつゝみし
一七 見恋 ほのかにもかたるはかりの面影に夢てふ物は枕にそ見し
一八 わたつうみのあまの住居のみるめたに思ひいらすは朽やはてまし
一九 忍伝書恋 けふあすの命にかくる言のはもしのふる中にほとふるそうき
二〇 十書九不逢 まれにたに見すやいかにとおほつかな書やる文の数はつもれと
二一 尋恋 分まよふ袖よりかすやそへつらんをしへぬ宿の道芝の露
二二 尋縁恋 聞えあくる雲ゐへたてゝ沢に鳴たつねかねたるうき身をそしる
二三 祈恋 くり返し猶そ頼まんこりすまの末のたよりとなりもならすも
二四 契恋 ことはりの外にたのむもはかなしや世々のむくひは神そしるらん
二五 神もうけす人もつれなし幾度か恨所や身にかへるらん
二六 人はいさしらぬ心をかたらふやたゝさきの世をかこちよりつゝ
二七 行末の心を見せつ見んにたに先此くれのかはらさらなん
二八 たのむなりいひし言葉の末の松まつ夜の袖の波はこせとも
二九 夢中契 たのましな我心から見る夢に契るも人のこと葉ならしを
三〇 馴不逢恋 年月をみなれそなれし松かねのあらはしてたにいふかひもなし
三一 あらはあふぎの 織女の思ひにつらき契たにあらはあふ夜の道にたのまん
三二 待恋 身におはぬ道をしらせよ今はとて待もよはらん宿の夕暮
三三 時わかぬ思ひの色は峰に生る松に千年をふる心地して
三四 不堪待恋 今は身そうしみつ過るたのめしに幾度出て月をみつらん
三五 待空恋 こひわふる身をなくさめて鶯の鳴つる花や折もつくさん
三六 待くらすまの 大かたに過ける物かなけきつゝ待くらすまのなかき年月
三七 初逢恋 年月に朽せぬ袖とかさねてもけふのこよひにしく物そなき
三八 けふそ思ふ我身につくす年月のあたにはならぬ頼有世を
三九 思ふこと限ある世の小夜枕今よりおしきいのちをそしる

四〇 祈逢恋 神やしるなをさりことにあらぬ身をたえすにけふの逢瀬也とは
四一 旅宿逢恋 とりあへぬ契のほとやかり枕中〳〵ならんさよの中山
四二 深夜帰恋 月もはや空しく更て帰るよは頼む夢路も程やなからん
四三 深更帰恋 なくさめてかへす夜ふかし此暮と頼むに残る月のはるけさ
四四 したはしよ忍ふる道をふかき夜に思ひいれてやいそく帰るさ
四五 後朝恋 しれかしな我思ひねの夢たにもみつゝはかたしけさの別路
四六 名立恋 つゐにその思ふすちとてうき名をもさのみはいかゝいひもはるけん
四七 顕恋 小夜枕ひかさなれは人は世にゆるさぬものをこゝろとけぬる
四八 欲顕恋 今はその物あらかひも蓮葉のうへにやしるくみえんとすらん
四九 切恋 終にさてしらせ□たゝにやみやせん思ひしことは詞残して
五〇 厭恋 身のうさはいとふをこそはことはらめ人にかこたんことのはもなし
五一 被厭恋 うしとてもいとはれはてぬ世の中のたくひになさは身をや頼まん
五二 変恋 たれも此たのむにかたき世中を思ひかへさぬ身をや恨みん
五三 片思恋 年月は雲ゐはるかにあしたつの鳴やしほひのかた思ひなる
五四 忘久恋 おもほえす我や忘るゝ人やともためらふほとに過し月日を
五五 厭賤恋 誰に今思ひくらふる心とて身のほとをしもいひくらすらん
五六 うらみ 秋風に恨かちなる葛のはもうき身ひとつのうへと社みれ
五七 絶恋 いひてみるいはて恨みつその程の月日は空にしらすつもりき
五八 恨絶恋 人はそのかこと求めし身の程をなをさりにして恨はてぬる
五九 互恨絶恋 我のみと我をことはる恨さへ人もまけしの心そひなん
六〇 経年同恋 としをへてもかはる心を我のみや何なそへなくなく物おもふらん
六一 春恋 青柳のこなたかなたに吹風もたゝかた糸の乱てそおもふ
六二 夏恋 いかさまにむすひかをかん夏引の手引のいとの絶ぬ契りは
六三 冬恋 水鳥のうきねもかなし片敷の袖の氷のむすほゝれつゝ
六四 歳暮恋 行帰りうるはしれたる市人の心をしさもとしのくれかな
六五 昼恋 あちきなく暮しかねてはしたひけりよるは夢にも見えし面影
六六 夜恋 忍ふ夜の徒ふしをあやむしろあやめはいかゝのへもやるへき
六七 羈中恋 きぬ〳〵のむかしなからのうき物に幾夜おきいつるのへの月影
六八 初恋 今よりや浪こさしとのためしをも子日にちかき末の松山
六九 人伝恋 忍ひあまり心もしらすかたらふにおほつかなさやそへて歎かん

七〇 恋不依人
七一 恋人事
七二 恋涙
七三 寄月恋
七四 寄月恨恋
七五 寄風恋
七六 寄雲恋
七七
七八
七九 寄煙恋
八〇 寄露恋
八一 寄雨恋
八二 寄山恋
八三
八四 寄杣恋
八五 寄原恋
八六
八七 寄関恋
八八 寄橋恋
八九 寄水恋
九〇
九一 寄川恋
九二 寄海恋
九三
九四 寄島恋
九五 寄草恋
九六 寄思草恋
九七 寄木恋
九八
九九 寄花恋

いてわれをおもひな捨そあつさ弓ひくに心のたれをわくらん
恨わひ今はなみたにまかせきてまきたにほさぬ袖をみせはや
ことはれはそれにつけても落添て涙の外のうらみやはある
夜をへては光そふへき三日月やわれておもひのはしめ成らん
真葛原雲の衣に吹みせよ人をうらみの月のさよ風ィふかせみよ
おそふへき袖こそなけれ秋風の声にふれてもねのみなかれて
忘れしのたのみもうはの空の雲手をかへすまもしらぬ心は
しくれては色にやいてん風の上にあとをもとめぬ嶺の浮雲
下もえの煙や空にまよふらん雨とはみへぬ峰のうき雲
涙せく袖はしほきのこりもせぬおもひの煙けつかたもなし
恋わひぬときしもありと思ひ出は消はや露の秋の夕暮
待わひてたゝかりそめと思ひこし雨より鐘もはや更にけり
つらしとていとひもはてぬ契より恋の山にはかくれかもなし
年月をあはれ麓のちりならぬ名はそらにたつ山となるまて
ひきすつる杣木は音や年をへて袖は涙にくつるためしな
絶すふる涙もそめよこぬ人を松はら桧原色もつれなき
おもひねの夢をはかなみおきいつる朝の原はうつゝともなし
逢坂はしるもしらぬもと斗も我身のよそに聞やわたらん
思ひ川身さへなかるゝうき橋を心あさくもかけはしめける
何をかはもとの契に思ひ出ん野中の清水ぬる夜なれは
たのみこし末もとをらぬ思ひ川なかれてのよのみつからそうき
つれなさを我身にしれは飛鳥川かはるを頼むよるへはかなし
あたなれや人の心はわたつうみの幾度かはることをみつらん
たつねてもみるめしなくはわたつ海の深き契もいかゝ頼まん
ひとりねのかねきく島を思ひにてこたへもきかぬ世をつくせとや
つれもなきいつまての身の思ひ草なへての秋に色もかはらぬ
下もえはいはてそたゝに思ひ草われとひとしき種もつまはや
袖のうへの露のかす〳〵思ひ出るときは木ならぬ色そくるしき
及ひなき月の桂もおらぬ身の空にうき名よいかて立らん
あたなるは花もうらめし契あれや思ひつく身の思ひはかなき

一〇〇 寄花契恋
一〇一 寄花変恋
一〇二 寄鳥恋
一〇三 寄獣恋
一〇四 寄虫恋
一〇五 寄玉恋
一〇六
一〇七
一〇八 寄鏡恋
一〇九
一一〇 寄枕恋
一一一 寄衣恋
一一二
一一三 寄絵恋
一一四 寄糸恋
一一五 寄舟恋
一一六 寄瀧尽恋
一一七 寄催馬楽恋
一一八
一一九 寄名所川恋

契りをく中そわりなき待とをに思ひし花の春に逢ても
せめて猶よそに契らぬよしも哉ことはの花の色かはる身を
恨わひたゝかたはしをいひやるもむなしき空の鳥のあとかな
絶まある身のをこたりになしはてゝとかむる犬も哀とそきく
くらへはやおきわかれ行けさのまの夕をしらぬ虫の命に
きぬ〳〵のあくる光の一ときは玉にもかへぬおもひとをしれ
よしの川うかへるあはの玉とたに見せはや人にあたの命を
うらめしやいひかすめてはは光ある玉もかひなき袖のうへ哉
朝な〳〵忍ふるかけは移るやと人をかゝみにはつるくるしさ
恋侘る心をてらすます鏡よそにはしらぬ影もはつかし
今よりは枕たにせてあかしてん夢さへたゆと人のしるへく
我身のみおもひしほるゝしほ衣きなれぬ道をうらみはてゝき
恨てはしたふにはあらぬかり衣ねられぬまゝにかへしてそきる
偽のこゝろうこかすことのはやゑにかけるてふたくひ迄うき
契るかはなかき例の白糸も思ひ乱て末はたへけり
おもふかたの風を心にこく舟は我名になれや遠さかり行
くちねたゝふかき思ひのみをつくしそれかとのみのしるしはかりは
我門をさしていく夜の恨より夢に待見し契たになき
おき出ん我より先に鳥は啼ぬ行末かけて契るなみたに
よしやたゝなき名なりとも名取川なひく玉ものよる方にみん

（底本二行余白）

一二〇
一二一

わすれ□よ風に音する下荻のほのかたらひし名残ならねと
新枕ねよとつくるは嬉しきに夢たにおしめあかつきの鐘

注、イ本にない歌、四四・五三・六四・九九。底本にない歌八三。

雑

一 残月越関
二 野風

夜ふかしと人もとゝめし関の戸は月よりあくる空のけしきに
かこひをくかけなき野へを吹風に幾度露もをきかはるらん

三 あらし
四 海上雲
五 橋雨
六 故郷雨
七 薄暮煙
八 暁
九
一〇 朝
一一 名所山
一二 谷
一三 山陰写水
一四 水石経幾年
一五 池水久澄
一六 滝水
一七 飛滝音清
一八 海路
一九
二〇
二一 名所浦
二二 都
二三 禁中
二四
二五
二六
二七
二八 行路市
二九 閑居木
三〇 古寺鐘
三一 蕭寺
三二 閑居灯

身にしめてね覚の枕聞わひぬ松の嵐の小夜ふかき声
わたの原むかひの山のありなしは雲にしらるゝ波のうへ哉
けさも猶雲の絶まをつき橋に水さへこゆる夜の雨かな
忘るとはおもはすなからきてもみぬまやのあまりの雨の淋しさ
日暮れは浦風とをく吹しきてもしほの煙たつ空そなき
しるへせむかねはきくにもとくをそし我ね覚こそ時をたかへぬ(太神)
起いてゝみまれみすまれ独ぬる老のねさめは有明の比
出る日の光なからに朝かしは夕をまたぬ陰の涼しさ
雲かゝる山はかつらき玉かつらおもかけにたつ道のさかしさ
谷の戸はそこひもさらにしら雲のかゝれる嶺を思ふはるけさ
うこきなき山のすかたや池水のむすふ氷のうへにみすらん
落滝つその水上は白きぬにつゝむやいつのいはほ成らん
木のめはる春のみとりの毛衣の亀もすむまてすめる池水
牛女の織手をしるや天川おちくる水の滝のしらいと
かさなれる山のまに〳〵ぬきみたる音をも玉のすます滝浪
空に吹風をしるへにこく船も此世の外のよるへやはある
見しもきえなきも数そひ吹風の波まにとをきあまの釣舟
雨風をいかに定めて浮雲をこゝろのみちにいつる舟人
にほふ名は都はるけき能登の浦や香島をかけてよする白波
志賀の浦や花と月とを残さすはふるき都の名もくちぬへし
春夏のうつる日数もこゝにみんちかきまもりのさくら立花
雲のうへに花見てくれぬ夕ま暮帰るもむかし蓬生の宿
まなふへき人もまれなる百敷の道ある道は誰に残らん
月影も心をかなんさよふかき露をもみかく玉しきの庭
うちかすむいつれの花の枝ならん日影もにほふ紅の雲
あはれしれ市の仮やの世中に何をむさほる名をもとかめん
身をかくす宿も頼んうつほ木の空し心をはらふやまかせ
かたふける松もそ年をふる寺の尾上のかねにかへてそ聞
たのもしな世をまもれとて定めつゝ国にわかてる寺の数〳〵
かゝけてもみしかくもゆる灯のあすの雨しるよるの雨かな

三三 遣唐使餞
三四 旅
三五 夏旅
三六 寄杜旅
三七 野旅
三八 海旅
三九
四〇 旅思都
四一 旅杖
四二 旅夢
四三 風破旅夢
四四 旅行
四五
四六 寄月旅行
四七 山路旅行
四八 寄花旅行
四九 旅宿
五〇
五一 旅宿夜雨
五二 羇旅
五三
五四
五五
五六 寄関羇旅
五七 羇中嵐
五八
五九 羇中川
六〇 羇中衣
六一 寄月旅泊

もろこしのうみへの月のなさけにもともにみかさのかけを忘るな
故郷ははるかに出る沖つ舟くまぬもかゝる袖のしほ風
ほとゝきす心はしらすから衣きけは山路の臨そかなしき(本ノマヽ、旅)
風をあらみ露ちる杜の下草はよるの枕にかる人もなし
一夜よりなつかしみせぬ草枕いつくの野へかすみれつみてき
わたつうみや沖に出たる舟の中はみねのうつるも見えぬ杏さ
故郷にかへらん道もいさなへる海はいくかの波をわくらん
夢をこそ都にたのめ松の風きかぬ便もなみの遠島
越わひてつくなる杖も藤代の御坂にかゝる旅のくるしさ
追風にとも綱とける船よりもはやきたゝちや故郷の夢
けさは又都の夢の中絶し風のつてこそきかまほしけれ
けふも又ゆく〳〵はらふ袖の露草のまくらにいかゝしかまし
行末の道のつかれは何ならし家をはなるゝ涙かす〳〵
影はわか袖にやとしつ立よらぬかりねの枕月もさためよ
めにかゝる山のはもなき山にきてへたてぬにしも遠き故郷
かへりみる都の山をしら雲の忘ぬ花にけふもくらしつ
行末をいそきたつとてふかく見し宿のなさけもしらすかほ也(太神)
あつき夜はねやへもいらす旅の空はしゐなからも明しかねつる
分きつる袖を山路の雲は猶したふに似たるよるの雨かな
草枕みしかき夢は故郷にほとなくかへる道しるへせよ
とをつ人おさまれる世を思ふらん関の戸さゝぬ道に出つゝ(本イ朱)
たち出し日数とともにかり衣かさなる山はかきりとそなき
やとりとる我よりさきに夕霜のむすふは寒き草枕かな
かり衣野山分きてもしほやく浦こそかたきたひの空なれ
身をかろく都の外をもとめつゝ出たつ人に関もりやなき
いとふとて何かはかひもあらし吹袖を忍ひてゆく山路かな
吹しほる野への草木の色をみて嵐を袖にわすれてそゆく
草まくらおき出てゆく朝川の水のかゝみの影そはつかし
里とをみ衣うつ夜の秋風も袖にこたふる草まくらかな
かち枕月よりさきにさためすはうかれて波のいつくにかねん

六三 名所旅泊
六四 旅泊夢
六五 山家
六六
六七 山家夕嵐
六八 山家路
六九 山家梯
七〇 山家杉
七一 山家鳥
七二
七三 山家待人
七四 山家人稀
七五 山家夢
七六 山館煙細
七七 田家
七八
七九
八〇 田家煙
八一 田家雨
八二 田家見鶴
八三 蓬
八四 苔
八五 幽径苔
八六
八七 なひく玉もの
八八 篠
八九 竹
九〇
九一 竹風如雨
九二 窓竹

越て来しやまとにはあらぬから泊心とめぬは草まくら哉
きゝわひぬ夢おとろかす波風も[　　]
山里は冬そさひしさまくらせん流も石も霜とちにけり
竹の垣柴のとほそのはかなきもかりなる世にはかりならぬ哉
住なれし都の松の声も哉山はあらしにくるゝさひしさ
雲まよひ雪ふりつもる山にたに心のみちはうつみやはする
世中はあやうき物とのかれても同し道なる峰のかけはし
しつかなる月日はおもほえす杉の木たかくなれるやまさと
とふ人のたよりとならは山ふかみ鳥のあとをも猶やいとはん
とふ人もあらしとや思ふ山ふかみ花ふみしたく鳥の声〳〵
山にても浮世をかたる人も哉猶すみよしとおもひつくへく
あと絶て住人もなき山里にうらむる鶴の声そさひしき
絶す吹松風なから山にても猶ちりの世の夢や残らん
山人の薪すくなき帰るさのすみかしらるゝ夕けふり哉
一年にさま〳〵かはる小田のおもいかに住つく庵なるらん
露ふかき秋より後の小山田に残るもかりの庵をそみる
小山田はすくろの薄一くろをゆつる隣も見えぬかり庵
たてそふる煙(大神)もとしのゆたねまく荒きの小田の里の朝夕
はれくもる雲(曇)の往来も程近き山田の軒にくらき雨哉
門田にも雲ゐの友はあしたつのたつねくれはそ跡はみゆらん(底本)
さく花のあた名もたてし桜麻の中に蓬はなをき姿を
ふかみとり岩ほも山もむす苔の外に道ある水の一すち
むす苔も心やはなき三のみちひとつみとりに跡絶にけり
山ふかき住居もさそな朝夕にかよふともなき苔の細みち
はかなくも水の心にまかせつゝなひく玉もの乱てやゆく
程なしや過にし人も篠むまの昔の道はしのに恋しき
窓(大神)の内に夜ふかく月もさし入としつえをすかす竹の涼しさ
風にたにおるへくもあらぬなよ竹の葉かへぬ色そ世の例なる
けさみれは夜のまの風やいかならし露も残らぬ竹の下かせ
むかひみる窓より西の峰高き雪の音きく竹の下かせ

九三 窓前竹
九四 窓前栽竹
九五 庭竹
九六 竹不改色
九七 松風調琴
九八 松風入琴
九九 峰松
一〇〇
一〇一 谷松年久
一〇二
一〇三 澗底古松
一〇四 浦松
一〇五 庭松
一〇六
一〇七 砌松
一〇八
一〇九 松久友
一一〇 松契遐年
一一一 松添栄色
一一二 松葉不失
一一三 名所松
一一四 峰椿
一一五 椿葉伴齢
一一六 桐
一一七 磯樫
一一八 暮林鳥宿
一一九 河辺鳥
一二〇 鶴帰畢
一二一 島鶴
一二二 鶴立洲

月は入ぬ雨さへふりて窓の内はうきふししけき軒の呉竹
枝の雪螢あつむる窓のまへ夏冬かくす竹うへてみん
まなひうる庭のをしへは有といへとしるきにあらす竹の一むら
時をわく草木にあらぬ呉竹のみとりや君か万代のかけ
風の音をことに聞てや松のうへにわかるゝ鶴の帰り住らん
をそふへき涙ならめや琴のねに露も残らぬ峰のまつ風
陰高み松はみとりを吹風の空にわかるゝ嶺のしら雲
いくとせも同し緑にたちかへるいなはの山の峰の松かせ
おひのほる松やいくとせ谷せはみ嶺まてつゝくみとり成らん
鶯の初音にそおもふ子日せし春やいくよの谷の松かえ
かけふかき水のひゝきも谷せはみ峰まてつゝく松風の声
みるまゝにいくかへりかは浦浪もこえける松の年をふるかけ
(天文二年六月廿五日聖願法楽当座)
うこきなき岩根におふる種をしもうへて幾よの庭の松かえ
ちりうせぬ詞の道をおもへたゝ何かみさほに庭の松かせ
いさきよき玉の砌はつもりそふ松の落葉もかそへみつへし
ちりうせぬ落葉やいつく曇りなき玉の砌の松風の声
(寛禄三年十一月十八日当座)
道し有とむかしを今に思ひ出るときはの松の色をためしに
色かへぬためしのみかは松のはの散うせすしてよゝをかもへん
いろといへは花も紅葉もうつろへる外にちとせの松の一しほ
ちりうせぬ色を例にけふ毎のたむけは世〻の老松のかけ
ときはなる色は高砂住江もあひおひに見ん辛崎の松
みるにあかす花さく春に万代も八峰の椿かけてふりせぬ
あかすして君かよはひは椿さく巨勢の春野を世〻にかもみん
たはふれのことのはならは桐のはにうちゝる露を玉といはなん
岩かねにひとつにねはふ樫の木やあら磯波もうこきなからん
ねくらにをゆるさぬ木〻の枝もあらは立名をおしめ村鳥の声
河風に吹方見えて立浪の色もわかれすわたるしら鷺
沢水にぬれつゝ鳴や夕くれはかへる雲井のつるの毛衣
心をや蓬か島にかはしまの水のとしふるあしたつの声
河波のよせてかへらぬ月も日もしらて世をふる鶴の毛衣

一三三 芦間鶴
霜雪(太神)をうは毛にはらふたつのふむ跡よりあしもうら枯(のイ)やせん

一三四 鶴伴仙齢
千年へていまかへりくる鳥もありと幾たひ君か御代にかもみん

一三五 名所鶴
あしたつの雲ゐにかへる名残をもしたふにゝたるわかの浦波

一三六
たつそなく難波の浦にやまとこひねられぬ夜はや明(ンイ)んとすらん

一三七
子をおもひおきつの浜に夜(のイ)のつるやみは雲ゐの月もはれすや

一三八 関鶏
山かつらかけのたれ尾のたれを先こえよと明る関ちなるらん

一三九 鷺
むれゐるやにこれる水の浅みにもおきつ白波たてる白鷺

一三〇 江雨鷺飛
水さむみ入江の浪は雨なから雪もましりてわたる白さき

一三一 猿
夜あらしに残らすちるや木のはさる水には月の影したふらん

一三二
ちる花も落葉もあたし(らイ)世中の木のみにさるの心とむらん

一三三 瀬魚
たれもみなかすならすとも滝つせにのほれる魚を心とやせん

一三四 絵
ある物と声をもかをも花鳥にわすれてうつすすかたをそみる

一三五 晩鐘遠聞
夕日影かたふく山はしら雲のいくへのそこにいりあひの声

一三六 窓灯
月は入ぬしはしまとろむ窓の内に見はてぬ夢の残る灯

一三七
おほろなる光のみかは春の夜の月よりのちの窓のともしひ

一三八
雨風の窓のうちなるともし火は月日にまさる光とそみる

一三九 釣舟
あまをふね風にまかする釣の糸のすくなる道にまよはすもかな

一四〇 眺望
雪はけさいつくにみるも四方の山へたてぬ富士のふもと也けり

一四一
はるゝ夜は空もちかしな天の川浪こゝもとに見えて涼しき

一四二 河眺望
ちりまよふ木葉也けり河舟の山よりいつる水のしらなみ

一四三 海辺眺望
秋風の木葉よりけにかろかれやおきゆく浪のあまの釣ふね

一四四 望遠帆
おもふかたの風にほかけて行末や空に入てふあまの釣ふね

一四五 述懐
すなをなる道の光の玉くしけふたゝひ君か世にいてゝはや

一四六 寄月述懐
なへて世のみてるかかくて忘れめや今日望月の行末の空

一四七 寄雲述懐
むかしをもへたてす空に立つゝく八雲に道(のイ)を猶あふかなん

一四八
尋ねはやありとみしまも浮雲の消(きゆるイ)は四方の外(空イ外イ)の空かは

一四九 春述懐
花鳥のかへる道にはともなはて春のわかれは身にとまりけり

一五〇 独述懐
ことはりもしらてや終にやみぬへき誰にはるけん思ひならすは

一五一 寄世述懐
そむくとて雲にはのらて雲のうへに立なれしまゝの世ゝそ忘れぬ

一五二 寄玉述懐
きすもなき玉になくてふ心もてなき名を神に終にはるけし

一五三 名所述懐
うきことはやく過して吉野川心にとめぬこの身ともかな

一五四
君かため祈るもたかき春日山おひそふ(生てイ)松に万代のこゑ

一五五 寄名所述懐
世中にいつか思ひのかひかねを吹らん風もそらにこたへぬ(ルイ)

一五六
うきことも身をなくさめて打ぬるやたゝ夢のまのさよの中山

一五七 懐旧
夏の日のなかきをすさむ雲の上けふも昔の袖の涼しさ

一五八
永正九年五妙花寺関白卅三回忌追善二首懐紙イ朱
同十四後成恩寺関白追善二首懐紙イ朱
木からしのみやこも寒きけふにあひて霜に朽けん野へをしそ思ふ

一五九
今も猶宿はむかしの桃の花いはぬもしるき道を残して

一六〇
天文八丁三道通院三回追善二首懐紙イ朱
ならひとてけふまてなれん形見をもかへてなみたの藤衣かな

一六一 対月懐旧
折しもあれ物思ふやとの月影にいかなる笛の声をそふらん

一六二 寄月懐旧
昔をも雲井はるけき月はかりうつさは今もうつらさらめや

一六三 寄水懐旧
あとゝめは四方の海さへ浅からん数かく水にしたふいにしへ

一六四 夢
身のわさをあとなき物といひもせし夢はその世をけふみせてけり

一六五
なき人の見えつる夢の嬉しきにかよふ心をしるよしもかな

一六六
ぬるかうちをはかなくのみは神も見しうき世を夢のつけにしらせん

一六七
のとかにもまとろむほとに見し夢を思へはなかき夏の夜の空

一六八
世中よ一夜のうちもうたゝねに見しは昔にかへる夢かな

一六九
あちきなく花はかはらぬとし〳〵を夢現ともさためかねぬる

一七〇 隠士出山
仏さへいつる時ある雪の山たれしらかみをはちははつへき

一七一 対鏡知身老
つもりてはいくよの月のます鏡老となる身の影うつすらん

一七二 市商客
空にたつちりとやかるの市人のおもき宝に身をもかふらん

一七三 樵夫
しらすまたいつれの木ゝか(にイ)山人のわきて心のしをりしつらん

一七四 樵夫婦
山風は夕ゐる雲を吹かけておへる薪もおもきかへるさ

一七五 陵園妾
つかへつゝありしなからのこひしさもかはらす送る春秋のゆめ

一七六 披書逢昔
いにしへをしのふもちすり乱れてもおさまれる世を水くきの跡

一七七 往事
世ゝの事いかて南の山の竹くろましつくす筆はなしやは

一七八 思往事
同し事を又みる夢は有つへしかへらぬやたゝ身の昔なる

一七九 往事如夢
後の今を見るともかくやいにしへをしたふもおなし夢の世中

一八〇 釈教
水茎(草イ)のあとやは消るかゝけ見よつくれるつみは残るともしひ

一八一
法の門さしもあまねきちかひにはむなしく過す道やなからん

一八二 寄月釈教
思へ猶月の光を花とたにみるめのまへのさはりやはある

一八三　寄月密教
天地とひとつにたかき山のはの月にふたつの界をそしる
一八四　寄花釈教
数〳〵の御法もひとつ心よりさきける花の色としらすや
一八五　諸法実相
露の身を露としらは秋の田のかりそめならぬうき世なるへし
一八六　常有是好夢
うれしくそまよひはてつる長夜のやみをなくさむ夢も有ける
一八七　随喜功徳品
たれも世にすまはゝかなき水の泡のうたかた消ぬ身を頼まめや
一八八　法師功徳品
生くる身はをのつから仏をもわか物にしてまよひけるかな
一八九　厳王品
見よや此やしなひえては春の雨ひらくる花の時にあひぬる
一九〇　伊勢
君か代はいすゝの川のふかみとり松に百枝の陰の木高さ
一九一　社頭
よをうみにさしむかひても神垣や住よしとみる松の木高さ
（天文八年二月廿二日水無瀬殿法楽）
一九二　社頭松
千年とも松はかきらぬ陰しめて幾度かへつつくる神垣
（大永六年二月廿五日当座聖廟法楽）
一九三　社頭榊
花さける若木の梅に老松も今一しほの神かきの春
一九四　社頭榊
神垣は榊そしるしみわの杉世に住よしの松はありとも
一九五　社頭祝
梓弓やしまもるてふ八はた山道ある道に心ひくらし
（大神）
一九六　神祇
祈る世はいろ〳〵ことに頼みにきにきてにみせて神そうくらし
（永禄三年八月廿五日）
一九七　
うけよ神今はいかきの外の身も君をいのるはもとのこゝろを
一九八　
天にあふぎふしてや地にちはやふる神の外にはたれを頼まん
一九九　
三笠山まつさしおほひあしきにもたゝりなされぬ恵ふかしな
二〇〇　
契あれや天の岩戸の朝日影みかさの山をさして出らん
二〇一　
梓弓ちゝの社をひきかけて矢のことくなる道をいのらん
二〇二　瑞籬
今よりはとはりきけは日のまもり夜のまもりをあふく神垣
二〇三　慶賀
にこりなき心は神そみつかきの久しきかけは松をためしに
（天文六年六月廿五日）
二〇四　祝
君かめくみ月日とゝもにあふきみる空はかきりもしらしとそ思ふ
二〇五　
浪こさぬ末の松山君をゝきて二心なき世〻につかへむ
二〇六　
霜雪に世〻をかさねて呉竹のかはらぬ色や君につかへむ
二〇七　
色に出ていはぬまもしれ松竹を君かときはの千世に契りて
二〇八　
四方にしも民の草はゝ天津風ふくに任せてなひく心を
（大永七年九月廿五日）
二〇九　
治めしる御代の始と四の神旗手の風も君かまに〳〵
（天文七年三月廿五日）
二一〇　祝言
四方の国百のつかさもあひ逢てあふくやひとつ君かめくみを
（弘治三年七月廿日当座）
二一一　
吹からに松にのみとや聞えけん秋に千年をちきる初かせ
二一二　
君をのみ天とあふくやめくみたゝあまねき道を万代までに
二一三　寄日祝言
新桑の枝さす春の日の本や弓をかくてふ世にかへらなん
（天文三年八月十五日当座）
二一四　寄月祝
君か代に月のうちなる薬もる老せぬ秋の千年をもみん
二一五　寄国祝
もろこしもやまとの国もをしなへて治る道にへたてやはある
（天文三年三月卅日春日社法楽当座）
二一六　
春日山やまとの国はをしなへてわれとや神も君守るらん
二一七　寄花祝言
春ことに染いたす花や君に今猶千世までとみゆる色哉
（享禄四年九月廿五日）
二一八　寄社祝
あとたるゝ四方の社や君かへむ八百万代のためし成らん
二一九　寄神祝
治れるかたちはそれとめにみへぬ神に任せて世を祈るかな
（天文三年八月廿五日）
二二〇　千世のためしを
君そへん千世のためしをみつ垣にいはひそめてき山の名高さ
二二一　寄市雑
山ふかく住はすまなん世の中の市にもとらはありてふ物を
（太神）
二二二　寄木雑
今はとて宮つくりせよ山口にけつらて立ん木〻もふりにき
二二三　白
いかにみん花にまかへし雲の色の猶くれやらぬ山風の空
二二四　不尽山
消やらぬ雪を思へは年ことにかさなる富士の山とこそみめ
二二五　若浦
あしたつの霜夜をわふる声そへてね覚はさひし若の浦波

（底本二行余白）

二二六　
かり枕とをさぬ夢の行末にむかふ月もや夜半の関もり
二二七　
まよひてきかすにたすとて数ならぬ身をあはせたる暮玖枝の道

注、イ本にない歌、一〇八・一二一・一二二・二一六。
二一はイ本では二二の後。
雑の部一〇五以下にみられる詠出年月の（　）内の傍注は、書陵部蔵本（五〇一、七九一）称名院詠により補ったものである。

公条家集 下

（注　定数歌順を便宜上(一)(二)…をもって示した。）

(一)　着到百首和歌　永正五年九月九日

都立春　たちそむる春の霞の衣手も花の都の名に匂ふらん
連峰霞　遠近とわかれし峰の横雲もさながらけさは霞む空哉
霞隔行船　たえぬ(尋ぬイ)とも誰かはつけん行舟の八十島かすむあとの白波
古巣鶯　鶯はうつらん花のねぐらをもふるすながらやまつ思ふらん
求若菜　出てみる野守のあとをとめきてもまた下もえの若なたになし
垣根残雪　世は春に先いそかるゝ光をも垣ねにいとふ雪のむら消
梅花夜薫　身にしむ(めイ)は風より外の梅かゝにかさねまほしき夜半の小衣
梅移水　さく梅の下ゆく水もはやきせはうつさん花の鏡とも見し
柳芦露　蓬生にあらぬ柳の門もまたはらはゝ露や雨にまさらん
春月滝　恨ても雲は絶まも有ぬへし月やいかなる春の夜の空
朝春雨　此ほとの雪けにならふ朝くもりふるともしらて雨(すイ)に成ぬる
春曙眺望　つれもなき嶺たつ山もなかりけり霞を色の明ほのゝ空
暮天帰雁　夕ま暮何をおもひにかへるらん雲のはたての天つ雁かね
漸待花　さく花もけに此頃と思ひたつ心にかゝる峰のしら雲
花未飽　春霞たちてみゐてみ幾たひも心は花につきぬ色かな
花如旧　あたなりと見えても花は年もへぬかはらぬ色に又やたのまん
花下忘帰　ふるさとよ花しちらすはいかならん立出しまゝの春の木本
落花満庭　庭の面は花のところのしら雪にはらひもあへす冬籠けり
折款冬　おしめとも波におらるゝ花の色はかさしてゆかん岸の山吹
暮春藤　行春は名残おほくもさく藤のうらむらさきの色もかひなし
更衣惜春　たちかふるころもへすして夏衣きのふの春の色をしそ思ふ
籬卯花　卯花の雪と月との光にはたれをへたてんまかきともなし
尋郭公　吹風のめに見ぬものを時鳥雲のいつこの月にたつねん
夢中郭公　時鳥またてねしよをかこちてやかたらひすつる夢の手枕
郭公稀　こよひたにうとくも有哉時鳥さ月や末のむら雲(雨イ)の空
対橘問昔　年をふる松はあれとも橘の若木なからにむかしをやしる
滝五月雨　落滝つさらせる布もかすそひぬ又たかためそ五月雨の頃
竹間夏月　くれ竹のさ枝の露も月彰のあまりみしかきよをやうらみん
野夏草　夏ふかき草葉は冬の色ならん人めかれ行野への通路
瀬鵜川　はやせよりいそく心やうかひ舟此夕やみをさして出らん
螢似玉　つゝめともたれをみぬめの涙とて螢は袖の玉とちるらむ
夕立早過　雲もまつたか里まてといそくらんこゝにとまらぬ夕立の空
樹陰蟬　立よらん木(はイ)の下陰の涼しさをのか物なる蟬の声〳〵
納涼風　夕すゝみそとものならの下風も一葉の秋にならんとすらん
杜夏祓　いかはかりあすよりきかんみそきするけふは身にしむ杜の下風
山早秋　行末の光にちきれ夕月夜小倉(りイ)の山の秋のはつ風
七夕舟　天河とわたる舟の名残あれ(りイ)や軒はのかちのけさの白露
夜深聞荻　小夜更て月やいかにとうち佗ぬ雨にきゝなす荻の上風
萩移袖　我袖もあたなる物と秋風の色とる露や萩か花すり
行路薄　分ゆけは尾花なみよる秋風の名残露けき野への通路
虫声非一　同し秋にかはる思ひのいかなれやこゝろ〳〵にむしの鳴らん
草辺雁　是も又雲ゐの友と雁かねをあしへにさそふあしたつの声
田家鹿　なをさらに思ひし小田の独ねも更にかなしきさをしかの声
秋夕催涙　人しれぬ思ひよいかにたか袖も涙あらはす秋の夕くれ
臨水待月　山のはの月をみるめも程遠し舟こきいてよ秋のうら人
松月幽　ちりぬへきならひもしらぬ松のはゝ月に幾よのさはり成らん
月契秋　光をも秋に契らぬ月ならは猶いかさまの物はおもはん(をイ(底))
見月恋友　独見る月に(光イ)声する雁かねも忘れぬ友のつてと社(にイ)きけ
暁月厭雲　有明のたくひなりけり月に今つれなく見えし嶺の横雲
擣衣　いかなれは夜をかさねてもから衣打声寒き秋風の空
古渡霧深　深き夜の残ると見てや渡守舟出はとをきあさ霧の空
寝覚鳴　いかにせん鳴の羽かきかそへても猶夜はなかき秋のね覚を
紅葉浅(深イ)　紅葉ゝにおくある色を思ふとやさそふとは見ぬ山風そ吹
紅葉如錦　露時雨そむる紅葉の山はたゝ松の梢に中や絶なん

暮秋霜　草も木もいかにせよとて霜を今かたみにをきて秋はくるらん
初冬嵐　冬きてはよその木葉に声絶て松の嵐そ更にさひしき
枕上時雨　村時雨心もとめぬ名残をも枕にしたふわかねさめかな
窓落葉　木葉そとしつかに聞は窓の内に雨にまきれぬ声の淋しさ
寒草纔　さゝ竹の一むらなひく陰はかり残るも寒き庭の冬草
懸樋氷　人こそは音信絶め山里のかけひの水よこほらすも哉
寒夜明月　霜のうへくもるも見えす鵲のわたせるはしの月の光に
浦伝千鳥　よる波のたつ空もなく氷る夜にひとり千鳥の浦伝ふなり
水鳥多　声〳〵に夜寒を佗るをしかもの羽風もさそな氷る池水
篠上霰　山かせにあられ打ちる音はしてつらぬきとめぬ庭の玉さゝ
遠山雪　花にこそまつはとふへきみよしのゝ雪よりちかき春の面影
常盤木雪　時雨にもつれなく残るときは木の心の色をしほる雪哉
逐日雪深　ふりそふやきのふの空のうす雪をとはてくやしきけさの通路
炭竈煙　夕煙たつや雪けの雲間より見えて寒けき峰の炭かま
炉火忘冬　さよ更てかきおこすかけのくれなゐも花の春ある埋火のもと
歳暮忽　さま〳〵の春をむかふるいとなみの日数にあまる年の雪哉
思不言恋　口なしの色には出しさく桃の花の下道したにこひつゝ
忍涙恋　しるやいかに人のたつ名を思ふにも我身の外につゝむ涙を
聞声恋　聞たひに我音をそへて敬ともしらしなよその夜半の笛竹
不堪待恋　人はいさ心なかくもなくさめてまつにたえなん玉のをもなし
契行末恋　年月を何になくさむ心とて又行末をこりす契らむ
祈逢恋　祈りこし神のいかきのゆふたすきかゝるあふせの末をたかふな
忽別恋　まれにきて逢坂山のかひもなく鳥のそらねにはかられにけり
逢不会恋　思ひきやあひみし夜半のかねことも終に別の情なりとは
名立恋　とても身にたつ名ははれぬことはりを思ひしらせていかに契らん
不憑恋　誰に又うつし心の一さかり見えて悲しき月草の色
見書増恋　我袖はあしたの原の紅葉ゝにみえて染ますかりの玉札
被厭恋　くりかへしことはるふしもなかりけりたゝ一筋にいとはるゝみは
難忘恋　住吉の松はつれなき色にして道こそしらね恋忘草
留形見恋　かたみそとみるもはかなします鏡うつしもとめぬ人の俤
恨身恋　世の人のうきもつらきもはてはたゝ我身のうへの恨とそなる
暁更鶏　有明のかたふく月の名残をもしたふに似たる鳥の声哉
古寺松　人かけも今はあらしの声はかり松に残れる峰の古寺
晩鐘何方　暮かゝる雲より鐘の声す也かたもさためぬ山風の空
故郷路　かへるさの袖にはいつかはらはまし立出しまゝの道芝の露
橋上苔　山里のまへのたな橋苔ふかしいつくに通ふ道残るらん
暮林鳥宿　ぬる鳥のをのか羽吹もそひぬらん暮る林の山風の声
谷樵夫　山人のうたひて帰る谷の戸に峰の松風声あはす也
漁舟連波　何にさて心をとめん波の上うき身の外のあまの釣舟
山家隣　もろともに軒をならふる山住に出しと契る程も見えけり
山家送年　住佗はとはかりいひて年もへぬうき世にまさる山のおく哉
羇中衣　故郷は山かさなりて旅衣なれぬあらしにたへむ物かは
旅宿雨　ふる雨はぬれつゝ行し袖よりも聞に悲しきかり枕かな
述懐依人　思にはひとつは人にまさるへきわさをもしらぬ身をや歎かん
思往事　きくのみはうつゝにもあらぬいにしへを今みる夢の世に忍へとや
寄神祓祝　三笠山さしてそ祈る君かため松の嵐も万代の声

注、イ本にない歌、行路薄・述懐依人。イ本にありて底本にない歌、篠上霜。古寺松はイ本には晩鐘何方の後。

(二) 御着到百首和歌　永正六年九月九日

注　（　）で示した傍注は、続々群書類従第十四所収の、後柏原院御日次結題の公条の歌との校異をあらわす。

歳中立春　天つ空霞もやらて年の内はいたりいたらぬ春をみる哉
野外朝霞　けさそみる秋吹風の色よりも霞にかはるむさしのゝ原
海上晩霞　霞もや袖をかさぬるあま衣日もゆふ暮の浦の釣ふね
山居子日　山里に身をは思はぬ子日にも契りやをかん松風の声
水郷若菜　諸人の若なつむてふ袖の色に河辺の里も春を知らん
春鶯呼客　鶯は春のあるしと成はてゝやとの梢に誰を(待)よふらん
氷消田地　山川の氷も今はなかるらんとはたの面に春風そふく

南北梅花　くもるなよ月の南の梅花影はこなたに匂ふはる風
露暖梅開　をく霜のむすほゝれたるふるえにもけさ白露の匂ふ梅かゝ
春雁離々　いそくにや友も思はて雁かねの同し道にも行かへるらん
独見春月　独みる我影さへにくもりけり誰にかこたん春の夜の月
閑中春曙　誰かしるなへてうき世の花ならぬ霞のそこの春の曙
柳無気力　寒からぬ風のけしきも身に入てなひくに絶ぬ青柳の糸
旅泊春雨　こきよする舟もさはらぬ芦のはのみしかき夢や春雨の空
行路春草　末遠き霞の袖もみとりにてゆく手にかゝる野への若草
山寒花遅　消あへぬ外山の松の雪の色に花をことはる春の寒けさ
花下送日　今日〳〵と春の日数を詠きてうつろひかはる花の木本
落花入簾　おしめとも花吹いるゝ玉簾みとりを木〻にかへす春風
桃花曝錦　おりにあふ春の錦と咲桃や柳さくらにたちかさねてん
留春不駐　山川の花のしからみ雲霞何にかけてか春はとまらむ
羈旅更衣　花の色をおしむのみかは立出し都の春の衣かへして
残花何在　尋はやいつくの花に宿しめてとひかふ蝶の春を忘れぬ
人伝郭公　きくもたゝ人伝のみは雲ゐより猶はるかなる時鳥哉
寝覚郭公　ね覚する折しりかほにかたらふや世にたくひなき山郭公
盧橘子低　花ちりて雨おもけなるたちはなに霜の林もみる心地して
民戸早苗　秋の色やまたきみゆらんうへわたす門田の早苗露ふかくして
柚五月雨　時しありと柚山川の五月雨にいつの朽木の流れいつらん
湖五月雨　しほやかぬ袖もほさしなしかの浦は浪のいくへのさみたれの比
鵜舟廻島　あはれいかに明やすきよのうかひ舟島かくれ行程やなからん
連峰照射　さをしかの月待なれし峰つゝきあらぬともしの影したふらん
里蚊遣火　此比やかやりたてそふ夕煙よそめにきほふをちのさと人
閑庭瞿麦　おしむへき隣もしらぬ庭の面やひとりのためのとこ夏の花
沙月忘夏　かもめゐる真砂の月の影澄て夏なき波のよるそ涼しき
野亭螢火　月くらき野中の松の陰の庵ひかりもありとゆく螢かな
晩夏蟬声　聞はまた袂も涼し鳴せみのなみたに秋の露やちるらん
幽栖秋来　くむ人も見えぬ板井の水上に桐の葉落る秋はきにけり
二星適逢　牛女のまれの逢せに心せよ紅葉の御舟かさゝきの橋
織女惜別　まち〳〵て心やすめん程たにもまたみしか夜の星合の空
夜深聞荻　小夜更て露もおつらん秋風につれなく荻の音哉
萩花落水　ふるえにもとの心の萩か花野中の水を友とみるらん
女郎花露　よをこめて誰おき出し露ならんけさ色ふかき女郎花哉
風動野花　吹からに野へのちくさの打なひきめにみぬ風も色付にけり
鹿声何方　山風や空に聞えて鹿の音の秋のあはれやよもにみすらん
秋夕傷心　あはれいかになひく浅茅の色〳〵も人の心の秋の夕暮
遠天旅雁　半天におもひや佗る故郷も都も遠きあまつ雁かね
横峰待月　うき雲の横きる峰の秋風に心つくせとなれる月哉
明月如昼　よるならぬ都の名をも月影の千里にすめる秋風の空
十五夜月　これも又天の河原の秋の月年に一夜の名にや立らん
雲間稲妻　消かへり此身の露のたくひとや空なる雲も稲妻の影
名所擣衣　衣うつ吉野のおくの秋の風身にしむ色や花に吹声
霧中求泊　もしほやく浦の苫やとこきいれは霧の笹にまよふ友舟
伴菊延齢　咲きくの下行水やちよかけて秋をせくへき花のしからみ
霜草虫吟　花の色はあへすうつろふ初霜にそをたに残れ松虫の声
紅葉出垣　山さとは垣ほにあまる紅葉ゝのおく物ふかき秋の色哉
山路秋過　末遠くしくるゝ雲の山風に見えてとまらぬ秋の別路
初冬落葉　ちりはつる木葉に冬の色を見て枝に住鳥秋や恋しき
遠郷時雨　たか里の袖を尋てしくるらん木葉の末の遠の村雲
寒草処々　露に見し草の袂はほのかにてをき所なき霜の色哉
浜畔寒芦　夕日影入江の芦の枯しよりはま松かえも色そさひしき
月照網代　あしろもる瀬ゝのあたりは澄月の影見し水はこほらさりけり
連日鷹狩　あすもこんけふの狩場の名残あれや暮る末野に雉子鳴也
薄暮千鳥　身にしむは秋より後の夕哉あはれ千鳥の立ゐなく空
氷留水声　山川も冬は氷に音絶て松風はかりうきものはなし
寒閨聞霰　あられふる夜半の枕よ草の庵の雨には残る夢もありなん
水鳥馴舟　水鳥も氷の外を行舟に心へたてぬ声そ寒けき
雪中聞雁　雪のうち秋にをくれてくる雁や花の春にもしゐてとゝめん
眺望山雪　出る日の紅ふかき雲の色に花こそ匂へ雪の山の端

雪埋苔経（イ）　雪のうちは枯野の外に頼来し岩根の苔の道も絶けり
炉火似春　鶯のなかぬかきりの春の色も先しりそむる埋火のもと
老人惜歳　皆人の老をかへさん薬もる暮行年はかきり有にも
思不言恋　身をしれはうちいての浜の打いてぬ心の色をいかて見えまし
祈難逢恋　祈りても浮田の杜のうき中は神さへうけぬ契をそしる
難無名恋　くらへてもなき名はうしやたはれ島波のぬれ衣いつかほさまし
相思忍恋　世にもれは我身のとかに成やせん人にまけしと思ふくるしさ
不堪待恋　偽になれし夜来のいつまてかたゝうたゝねの月に明さん
臨期変恋　思ひかへす心もあらはさよ枕かねてしらせぬ夢のよそうき
時々驚恋　春の花秋の紅葉にうつる世を同し思ひの身にそ驚く
憑誓言恋　枝をかはしはねをならふるちかひあらは只花鳥のよをも頼まん
深更帰恋　よをこめてなく〳〵出し涙ゆへゆふつけ鳥の声も露けし
後朝切恋　年月は逢をかきりのうき涙けさの袖にはせく方もなし
逐日増恋　あかねさす日数も空に幾しほの思ひの色のはてそしられぬ
非心離恋　とりあへぬ心もゆかぬ別にはわするなとたにいふよしもなし
見形厭恋　いかにさて恋にやつるゝ姿をはあるにまかせていとひはつらん
披書恨恋　かきすつるたゝ一筆のあとたにも心をこめて人そつれなき
絶経年恋　雲かゝる峰のかけはし絶〳〵にかよはぬ中の年はへにけり
残月越関　鳥の音におき出てゆけは関の戸をこゆへき月そ空に残れる
風破旅夢　吹とふく風も幾夜のさゝ枕たゝ故郷の夢そみしかき
嶺林猿叫　猿さけふ峰の林の雲の色に雨ならすとも袖ぬらせとや
翠松邊家　尋ねきて此世の外とたとる哉空のみとりの宿の松風
山家人稀　山里は我あとはかりふみ分て又まよふへき道たにもなし
野寺僧帰　うき身をはまかせはてゝし雲水にかへるいつく野への古寺
田家見鶴　山もとの田面にみるもあしたつの声は雲ゐの物とこそきけ
樵路日暮　峰にのみ残る日影を頼てもくるゝふもとにまよふ山人
晴後遠水　はる〳〵ときのふの雨の山風にちりもまかはぬ水のしからみ（しらみにイ朱しら波）
滄海雲低　しほかまに絶ぬ煙やわたつ海の波のいくへの末のうき雲
漁舟連波　漂いつる末は千里のあま小舟まほにもみえぬ波のうへ哉
江雨鷺飛　鷺のとふ入江の雨の色をみてしらすうしほの日は暮にけり
夜涙余袖　思ひ出て落る涙そさよ衣袂にせはきむかしなりけり
憂喜依人　なへてその世のことはりや一さかり露の朝顔花の夕顔
竹契遐年　さゝ竹の色もかはらし万代に霜のいくたひしみはつくとも

注、イ本にない歌、寒閨聞蔵。祈難逢恋は群には万葉仮名。
絶経年恋は群になし。

(三) 詠百首和歌　太宰権帥公條

春

年内立春　あら玉の年のをはりをくり返し光つきせぬ春はきにけり
早春霞　春の色にけさは霞の立かはりゐかはる雲に山風そ吹
子日松　袖はへてけふさほ姫の姫小松引手も世〻に絶ぬ春哉
雪中鶯　春きても涙の氷時しらて降そふ雪を鶯のなく
野若菜　千世の春誰も心にしめしのゝみとりのわかなけふそつみける
梅風　たか袖にとまる物とも梅かゝは行末しらぬ春風の空
柳露　おとろへし柳の髪の霜の色もとけてやかゝる春の朝露
春月　春の夜は霞のうちの心あてにしらす程なき月の影哉
帰雁　見すやいかに翅にかけて行雲はやかてそかへる春の雁かね
春雨　もえいつる草の袂もみるか内に霞ところせき春雨の空
寄雲　行末なき空にうきたつ白雲はかけしや花にたくひさへうき
寄霞花　ひきかへて霞の袖をさほ姫の花に染てやふかくみすらん
寄露花　咲しより我も心をく露のあたにけつへき花の上かは
寄風花　こゝにやとしかしこにさそひ散花ををのか物なる枝の春風
寄月花　秋になと心つくしの月ならん花に木間もみえぬころ哉
寄雪花　ちる花のあたりの木〻は埋れて桜ひとつにうすき雪哉
春田　山川は氷とけても小山田のかへす待ていてんとやする
河款冬　やまふきのうつれる影をいさとたにいはぬ色をもさそふ川浪
松藤　行末や紫おふる野へならんさ山の松にかゝる藤なみ
暮春　今はたゝ花にまかへし面影も猶立とまれ春の白雲

夏

夕卯花　夕ま暮咲卯花の光より空にもきゆる峰の白雲
卯月郭公　春の色をかへて程なき衣手に露をきそめて鳴郭公
五月郭公　しのぶなよをのか五月はあやめ草誰もあやめぬ山ほとゝきす
夜盧橘　忍はるゝむかしは夢の道しありとぬる夜や分てにほふ立花
五月雨　野も山も雲に埋める此比は波にたゝよふ五月雨の宿
夏草　所せくしけさまされる夏草にをきわたす露もみえぬ道哉
夏月　秋風のちかくて雲や払らん夜をへて清き空の月影
螢　飛ほたるたれをまつとか短夜の更行まゝに思ひそふらん
夕立　俄なる風吹立て山川のにこれる波や夕立の空
納涼　立よれはあつき日影も蟬の羽の薄くもなるか木ゝの下風

秋

初秋露　草も木もいかなる色をしら露の思ひ乱れて置はしめけん
閑居秋風　花紅葉思ひ捨てし卓の戸も秋吹風を恨みさらめや
野草花　分ゆけは露にしほるゝかり衣すそ野は草の花の色〻
夜虫　夢にたにとひこぬ人をまつ虫の深き蓬の下に鳴らん
暁雁　今はとてたれきぬ〳〵におきいつるとこ世の雁は鳴てきつらん
深山鹿　いく秋かたへぬ心をつくは山思ひ入けんさをしかの声
杜月　今よりやふみならさまし月になる杜の下草露ふかく共
河月　更ゆけは月の氷も結あへすなかるゝ水に影そかたふく
　　河はたしかにありたくや
浦月　あまのたくもしほの煙ひとかたになひくも清き月のさよ風
島月　こよひわかいつくの方に家島のありとも月にねてあかさはや
江月　いくかへりたなゝし小舟思ふ人と見まくほり江の月の影哉
山朝霧　暮やすき光のみかは秋の日の出るもをそき朝霧の空
海辺擣衣　あさ衣ぬるゝを秋の露とたに思ひもしらて打あかすらん
田家秋寒　真萩ちるいなはも今はかり庵の身に入風を何とふせかん
野草欲枯　散はてし尾花かなみもをく霜に又立かへる野への色哉
庭菊　作りなす庭の山路の菊の露あかす千年の秋を契らん
雨後紅葉　いかなれは雲の衣は一しほも染そへぬ雨の木〻を染らん
河辺紅葉　竜田川時雨ふりをける紅葉ゝの色にみかさもそふかとそみる
山家暮秋　さひしさは冬そと聞し山里に思ふもおしき秋の暮かな
閏九月尽　くはゝれる猶長月とたのみこしけふの今夜も又や明なん

冬

初冬時雨　山やいかにつゐにもみちぬ槇の屋もしくるゝ音に冬籠りぬる
谷落葉　深き谷もあさくなるまて山風の吹たひことにちる木葉哉
寒草霜　をく霜のかゝれとてしもなてしこの枯なん花のかきほとやなし
篠霰　山おろしに霰ちりきて玉さゝのくまあるかたも光見えけり
池氷　ひまもなくむすふ氷にあしかものさはくもしらぬ池の面哉
冬月　閨の内の衣手薄しいねかての夢をはしるや冬の夜の月
河千鳥　風寒き川辺のちはら打なひき霜にもかれすたつ千鳥哉
行路雪　つもりつゝ山となるまて分かたき道をへたつるけさの白雪
里雪　人またん里をはかれしと思ひこし心も雪にあとや絶なん
歳暮雪　暮て行年もやいかにくる春の道まとふまてつもる白雪

恋

忍恋　大かたにおもふとまてはもらすとも見えしな深き下の心は
見恋　時のまもめかれぬはかりこと方に思ひうつらぬほとのはかなさ
不逢恋　今そしるかへむといひし逢事の絶てへぬるもあたし玉のを
待恋　又こよひ明なからなる槇の戸をおしはかりてや月そさし入
後朝恋　残りけり今朝おき出て露の身の消はともにいひし物から
久恋　しるしなき思ひのはてや千年ふるたつの音をのみ鳴とたにしれ
変恋　一かたにたのみかたさも身に入やこのてかしはに風わたる空
忍絶恋　終にその忍ふる道のかなしきは下樋の水の絶〳〵の声

寄秋月恋　恨あれや友と見つゝも秋の月とけてねられぬ思ひそふ比
寄秋風恋　いつか又せこか衣の秋の風うらめつらしとかたらひもせん
寄秋露恋　草も木もひとつ思ひのたねなれや秋をく露の深き袂は
寄橋恋　ふみみるもはかなく渡る柴橋のたはむはかりのことのはも哉
寄涙恋　から衣なるゝを人にいとはるゝ心もしらぬ涙もそうき
寄関恋　へたてある心のおくは東路の行末もいさやしら川の関
寄心恋　我もまた思ひもやましれなさの心くらへのほとをみせつゝ
寄衣恋　身にいつかきてもみるへきよそにして恨かさなる雲の衣手
寄鏡恋　立されはことおもかけのますかゝみむかふかうちを頼むはかなさ
寄舟恋　恋わひてたへぬ涙にしつむ身をすくはん舟の便をそ待
恨恋　思へたゝ世ゝの契りそ此世にも猶はれかたきうらみある身を
絶恋　程もへはおもひやなをるとはかりのとたえなからに絶んとやする

注、五月郭公はイ本には夜盧橘の後。恨恋はイ本には絶恋の後。

雑

関鶏　よそよりもあくる光は鳥のねに先見え初る関のあしかき（ら〈底朱〉イ）
名所鶴　年波もかへるやわかの浦風にきけは老せぬ老鶴の声（鶴のもこゑイ）
名所松　我見てもとはかり聞しいにしへや今もその世の住よしの松（もイ〈底朱〉）
名所橋　くりかへし長きためしと思ひしになと中絶しかつらきの橋
名所滝　落くるに道もさはらし吉野川岩きりとをす滝の白なみ
名所浜　駒なへてけさ打出の浜風にはや船よせよ浪路をもみん（めイ〈底朱〉）
羇中雲　山ふかみさかしき道の跡先をわするはかりうつむ白雲（はかりにイ）
旅泊　くかに迷ふ思ひをもしれかち枕所えかほの水鳥の声
漁舟火　風ふけは煙も浪もさはきたつ水よりもゆるいさり火の影
眺望　山の色よいつれ定めん朝夕に立まふ雲にかはるすかたは（とイ）
故郷雨　ふるき世をしのふの軒の雫のみかす〳〵そふる雨の音哉（かイ）
山家嵐　住まゝに心に残るちりの世も今はいつくにあらしふく山
田家水　時ありてせきつ落しつ山水をわか物かほの小田のかり庵
暁夢　夢よいかに見えつる人の今はとて立かへる道は明やはてなん
懐旧　末の世をみるにならひてしるしをく昔そ更に誠ともなき（こイ）
寄夢述懐　夢のよに生るゝ身とて幾たひか聞みる事におとろかるらん
秋述懐　はらひあへぬ草木たにしれ思ふ事秋をく露のかす〳〵の身を（ふかイ）
神祇　あまの原ふりさけこゝにみかさ山世におほふ神の広き恵を（るイ）
釈教　かす〳〵の仏はしるや我心ちらさしとこそはなたてまつれ
秋祝　年はちゝの秋のたのみを君か代に豊なれとそ祈きにける

愚点三十首

注　合点は、底本で二五首、イ本は一九首。内閣文庫本（二〇一・四三三）と照合して、三十首に合点を付した。三者の別は省略した。

(四) 詠百首和歌　太宰権帥藤原公條

春廿首

吉野山今朝は霞にふるとしの雪もや木ゝの花と咲らん（いふイ）
君か代のためしにひかん姫小松枝さしおほひ苔のむす迄
沢水に若なつむ野の花かたみめならふ草も見えぬ比かな
さえくらす嵐のたゝく谷の戸を春にこたふる鶯の声（髪イ）
吹くたる風とも見えす青柳のみとりのみかは露をふくみて
春の日に打とくる雪の色なからにほひは消ぬ梅の下風
立とまる遠方人の袖の音も四方にへたてぬ梅の下風（香イ）
みるまゝにいつふりそめて軒端より露のみ落る春雨の空
うちとくる池の鏡にすむ影や氷をのこす春の夜の月
秋の夜の月にさやけき雁かねのかすは霞に消つゝそゆく
いく霞へたてはてゝか月雪の光にとをきあけほのゝ山
暮かたき春の日影の打はへて猶あかすとやあそふ糸ゆふ
年をへてさてもかはらぬ花の色にあひみん事の命をそ思ふ
あま小舟はつせの山を吹風の空に吹たつ花の白なみ
今朝のまの花の錦を吹風は雲のはたてに物思へとや

世中のおもひのたねか山さくらまつに程へてちるは程なき
思ふへきものとも見えす乙女子か袖ふる山の花の夕かせ
紫の色しあせすはいつまても春をすみれのつまんとすらん
暮てゆく春の行ゑや山吹の八重にかさなる遠の白雲
おしめとも藤咲かゝる松たかき尾上の鐘に春そ暮ぬる

夏　十　五　首

ぬきかふるけふの衣は花の色を忍ふもちすり乱てそ思ふ
夕浪のこすかとそ思ふま鳥住うの花さける杜の下道
待人の情もしらす夜をかさね何と岩木の山ほとときす
一声はそれかあらぬか時鳥あやめの枕そはたてゝきく
時鳥世にめつらしき声の色ををのか花なる桧原杉はら
立花のはなちりにけり今よりや又一むかし遠さかるらん
五月雨に汀や増るあさみとおりたつ鷺もみへぬ川つら
五月雨の日数へぬとや空よりも猶かけそふる滝の白いと
野へは今ひとつみとりに夏草の生をくるゝも見えぬ色哉
後の世のやみそあやなき鹿まつとともしさすなる光ながらに
とふ螢雨ふりすさむ夕やみに空にはれたる光をそ見る
蓮はのうこくは風の色よりもこほれてかゝる露そ涼しき
うつせみのなけともいまた涙とて袖には落ぬ［　　］しら露
秋はまたいはねの水のいはすとも涼しき色は空にしるしも
かそふれは年のなかはをいかにして名はみな月とはらへはつらん

秋　廿　首

身にそしむ秋はけさより立田山長き夜つくる鳥の初声
忘られぬ年の一夜をおもふにや猶あひ見まく星合の空
いかなれや風にふしても白露のおきゐて見ゆる庭の萩原
春秋をたゝ一もとの真萩原下葉の露よ花のにしきよ
待いてん月を思はぬ身にしあらはいかにむかはん秋の夕暮
山ふかみこなたかなたにかた糸のあはぬ夜おほきさをしかの声
露けさのをのかとこ世をきく人の枕にならす初雁の声
打なひき雲吹風に花薄ほのかに見ゆる山のはの月
空の月こゝにやとりて行水もさなからのほる河風の声
山風や千里の雲をまきもくの桧原の外に月そ更行
くる秋はさはらぬ物を八重葎しけれる宿は月なへたてそ
見し夢のはしめもはてもおもほへすさたかならぬを長き夜の空
出る日のなかはたけゆく空とたにしらてよふかき霧の中哉
きゝわきてたれことゝはんうき秋を心〳〵のむしの声〳〵
露霜もをくらん物をいかにして衣手かろくころもうつらん
しはし猶しつかかり庵かこふなるわさ田はからし陰あらは也
時雨ゆく雲をもかけしかつ染て入日かゝやく峰の紅葉ゝ
さかりなる紅葉は山の色にして松にのみきく風の音哉
花はねにかへるはしらす秋はたゝ空に木葉の乱てそ行（イホテシ）

冬　十　五　首

行秋の夢のうちより夢となり雨としくるゝ神無月哉
風そよくをさゝかうへをけさみれはたゝをく霜の声にそ有ける
とはゝやな夢の名残も行ゑなきたか枕にか木からしの声
風はやみうきたつ雲の衣手につゝみかねてもちる霰哉
朝戸明て残れる月の光より庭に見そむる薄雪の空
雪はけさ柳か枝にさく花のこやともいはん塩かまのうら
ふる雪のかさねあけたるひえの山今朝こそ富士をたとへてもみめ
氷けり出る日いつく鴨そなく此川上は山かけにして
水上は岩にせかるゝ山川やむすふ氷のはしめなるらん
草はみなかれ行まゝに通路も人たのめなる冬の山里
おれふして有葉も見えぬ乱芦の氷の上に根を絶ぬらん
風寒み此よのうきをすくふへき友なし千鳥声のあはれさ
小野山やいたゝく雪もさむからし炭うる声のおきなさひたる
閨さむみかきおこしても灰の下に深くおほゆる夜半の埋火
行年に身をおもふとてあちきなく来る春をしもいとひかほなる

恋 十 首

ゆく末の心はしらすいひそむるけふはあたなる恋もする哉
おもふ事しのふの浦にこく船のさしていはぬも袖はぬれけり
なく涙袖にみなとのさはきてももろこしはかり遠き隔よ
こよひとも契らぬ身こそあはれなれなくさみかねつてる月をみて
柞山ちることのはを吹風の空にみちぬる身の思ひ哉
よそにのみ三笠の山のかほ鳥のかた恋しつゝ音をのみそなく
はかなしや思ふ心のひく方にいつはりながらたのめそめつゝ
[illegible]の契りになるゝ身にしあれは今一たひといふもはかなし
別路はおなし事をそ契をく君わするなよ君わするなよ

雑 廿 首

旅 五 首

今朝きゝしゆふつけ鳥も友ならす今行末は家もあらなくに
故郷をさやにも見しかへたてこし山又山そ雲のそこなる
住なれぬやとりは悲し月夜よし河音清し山にかもねん
草枕たひの衣はたゝ一重かさねんといふ友たにもなし
とふ人も波路隔る袖のうへしほたれまさる須磨の浦風

山 家 五 首

すまはたゝふかき山にと思ふこそ世を捨かたき心なりけり
山ふかみ松をあらしのしほりきてとひこん人のしるへかほなる
しつかなる心になかき日くらしのなくねかひなき山のおく哉
竹あめる垣ほの内の夕日彩ちゝの金のくたけてそちる
花紅葉たか門さしてみる人もよそに過行山路なるらん

鳥 五 首

空に又いかなる友のありかほに時の雨よふ山鳩の声
声さひしをのか姿も墨染のゆふへの色にからす鳴也
朝夕に軒端の竹のおきふしにちかくなれくるむら雀哉
行かへりすたれうこかし吹風のたよりもとむるつはくらめ哉
まよふともしゐてたゝしきわかの浦の道しるへせよあしたつの声

祝 五 首

引かへておさまれる世に梓弓五十鈴川なみ立かへらなん
心たゝくもる時なく春日山出る日影に世をいのるかな
ことのはのちからをもいれす治めしる道を守らは住吉の神
物いはぬ空にまかせて民の戸の年豊なる時はしるしも
千年をもあかすよ君か年なみは松にもこえて猶かそへてん
（万代も君にはあかぬ）

(五) 詠百首和歌　正二位公條

春 二 十 首

立春風　むすひしもかはらし風のいかなれはけさ吹かへて氷とくらん
霞始聳　ことさらにつくりなしてやきのふみぬ山の姿に霞たなひく
野辺霞　わきかねつたてるや霞紫の色こき時の野への霞は
求若菜　あさりするたつの千年の跡をしも宿に求てつむ若な哉
厳残雪　みとりなる垣ほに残るうす雪は鳥のふくめる花かあらぬか
待鶯　うちとくる軒のつらゝに鶯の涙や春もなとむせふらん
暁更梅　春の夜のね覚みしかき鐘の音にあらそひかねて匂ふ梅かゝ
夕梅　かこちつゝたれをとゝめん夕やみもたと〳〵しくもあらぬ梅かゝ
柳　春くれは松にとおもふ色に又今一しほはそむる青柳
磯春草　うらわかみもえ出る磯の若草はぬるともいかゝ沖におれ波
江春月　あま小舟こき出てみん程もなくやかて入江の月そ霞る
去雁遙　行空をしは〳〵それとまかへまし雲さへはては霞む雁かね
尋花　忘られぬ心はかりそしるへなる何にたくへて花を尋む
初花　春ふかくいかに見えけん梅花八重さく後の一重桜は
雨後花　きゝあかす夜のまの雨の朝くもり花を光に日も出にけり
羈中花　行つかれ立よるからにかり衣花にみしかき春の日の影

落花　ちると見て松たにはてす花の木のうたて青葉もそはんとやする
躑躅　名もしるし山にかゝやく紅はあかねさす日の下つゝし哉
蛙　水かるゝ古井の小草もえ出てふかきかけとや蛙鳴らん
春欲暮　行春のなかれてはやき川岸にうとまれけりな山吹の花

夏十五首

首夏藤　春の内は桜にまさる花なしと待えて爰に咲る藤かえ
余花　春くれてをのゝしの原吹風のあまりて夏に匂ふ一はな
新樹　朝露にうつろう花の色よりもほとなくしける若みとり哉
葵　色かへすその神山に又今をかけて二葉のあふひ草哉
里郭公　なく里をあまたに人をさそふとてたかは入し山ほとゝきす
市郭公　市人のかへる山もと暮はてゝわれたちきけは山ほとゝきす
橘　香に匂ふ花立花と見し夢といつれか遠き昔くらへむ
池菖蒲　夏なから池は氷のひきまゆのひくねもなかきあやめ草哉
朝早苗　朝な〳〵はこふ早苗の程見えてうへむ田面の末のはるけさ
夏月涼　夜も更ぬ月の光や扇もてまねき出せる空の涼しさ
鵜川　うかひ舟やみを我身にみなれさほさして行ゑも山陰にして
蓮　をきあまる秋のちくさのうへよりも露の光は池の蓮葉
氷室　夏もはやふけぬとなくや蟬の羽のうすくこすへもならんとすちん
野夕立　一むらの野原の松は夕立のやとりならてもかけの涼しさ
螢　恋せしのしるしなしとや螢すらみそき川原にもえて行らん

秋二十首

残暑　またきより猶暮かたき夏の日の残るも秋のうきになしつゝ
待七夕　心なく契りをきけんこゝろにはまたすやいかゝほしあひの空
山家荻　ふもとより吹のほるらし松杉はしらぬ風きく軒の下荻
萩　真萩原花はすくなき古枝にそ下葉の露をふかくみるらん
薄　露やおもき風もやあらき花薄一むらけさはなひく秋哉
蘭　ぬき置てうつり香まては蘭たかかたみとか花に咲らん
竹露　袖にちるたくひとそみる木にもあらす草にもあらぬ竹の下露
秋夕雨　ふしましり色には出ぬ桐のはの音に染なす夕くれの雨
虫怨　うらみつゝ長き夜すからいかなれはつくしかねたる虫の声〳〵
鹿隠霧　あたにしも霧にかくるゝ女郎花心かはして鹿も鳴らめ
雁　来る雁の翅にかくる一むらはこしちの空の雲も珍し
駒迎　たか方に引か別んけふは先あふ坂こゆる望月の駒
待月　待うかれほしの光のうすくなる雲をそたのむ山のはの月
月契秋　時鳥あはんともせぬ人の秋を月にはわきて契る秋かな
見月　白妙の浪をしきたる月影や四方をみるめにあくからすらん
翫月　ひとりたに秋をともなひあかすよにましてにきはふ月の杯
惜月　かたふけはほとなき月をみるにこそ年の更ぬる身は哀なれ
擣衣　うちたゆみまき返す程や秋のよの長き砧の思ひやらるゝ
黄葉　染るかとみつれはいかゝ柞原やかて枯葉の色もわりなき
暮秋雨　朝夕にをきあまる露を暮て行けふにしたはる秋の雨哉

冬十五首

山初冬　ちりにけりまさきのかつらくる人もおもひ絶なん冬の山里
時雨　秋のうちはむすほゝれたる雲霧の時雨になりてはるゝ一方
橋落葉　山風や今朝かつらきの神な月よはに木葉をわたすかけはし
残菊　仙人のおる袖ふれし種とてや冬まて花のにほふ白菊
山夕風　一むらの雲も残らす山風のはらふと見れはをける夕霜
氷　山川の水はうこかす氷してたゝきてみれはあらぬ岩かね
寒月　影さむし出てたに見す秋よりも夢はむすはす月の夜長さ
千鳥　小夜千鳥ひとり声して灯のあかしの浦に何まよふらん
鴨　今は猶あとはむかしのしらま弓磯へに鴨の打詑てなく
網代　もるまゝに網代木による日をへつゝ袖寒からし宇治の川風
霰　蓬生のはらはぬ庭にゐるちりのけかれぬ玉をしく霰哉
湖雪　波風のひゝきも空に高島の雪打はらひいつる舟人
篠雪　霜さやき霰みたるゝ玉笹の風をしつめてつもる雪哉
向炉火　寒しとてさしよるからにさしかふる炭つきにける埋火のもと
関歳暮　つもりては鏡のかけもはゝかりのせかれぬ年にかはる黒髪

忍恋　末つゐにあはんともせぬあやうさを思ふほとたに涙もらすな
不見恋　いとゝ猶思ひもまさはみまさりはねかふ物から又いかゝせん
不逢恋　いひよるを契りと思へはかた糸の同し方にてなと絶にけん
尋恋　うらみしも心ふかさを山ふかくのかれは道をいつくとかせん
契恋　くりかへし契ることくはそひかたみと絶の程のなくさめもうし
逢恋　夢かとよ心きもさへ月影にあかすかたらふさよの手まくら
別恋　わかれたゝいつくの宿にきくとてもへたつる関の鳥の声哉
後朝恋　かへりてはおきゐし露の花のえに思ひをみするけさの玉札
顕恋　よしやさはゆるすにかへはなくさまんなとあらはれて人のつれなき
近恋　ちかしとてかはらしとたに頼まれすみる〳〵うつる花を詠て
馴恋　いつとなき恨はめなれ耳なれて身におはぬ人そいふかひもなき
不憑恋　我のみはあらしと思ふ笠やとり立よれは又したひかほなる
久恋　よそに今あらたまりぬる人を見てあやしやいとゝ我そふり行
悔恋　つくしてし心の末もかひなさは我か人かとたとるはかりそ
忘恋　我も人も程ふる中に忘草しけるは同し種かあらぬか

雑十五首

暁　天つ空明ぬる色に先立てまつひかり有るかねの音哉
薄暮雲　おしと思ふ日影のみかは夕月をむかへん山の雲そつれなき
松歴年　としをへて今一しほのまさるには昔は松も色なかるらん
里竹　あさはかに住なすとてもさゝ竹のみ山にゝたる風のをと哉
山館煙　けたものゝけかす薬をねる山のすみか□見えす煙たなひく
古寺滝　吹まよふみ山おろしに法の声滝のひゝきに猶いさきよき
田家　一とせにさま〳〵かはる小田の面いかに住つく庵なるらん
故郷雨　忘るとは思はすなからきてもみぬまやのあまりの雨のさひしさ
旅　故郷ははるかにいつる沖つ舟くまぬもかゝる袖の塩風
猿　夜嵐に残らすちるや木葉さる水には月の影したふらん
鷺　むれゐるやにこれる水の浅みにもおきつ白波たてる白鷺
名所鶴　猶思ひおきつの浜の夜のつるやみは雲ゐの月もはれすや
野風　かこひをくかけなき野へを吹風にいくたひ露も置かはるらん
夢　なき人の見えつる夢のうれしきにかよふ心をしるよしも哉
祝　浪こさぬ末の松山君を置て二心なき世ゝにつかへむ

注、イ本にない歌、逢恋。見月はイ本には翫月の後。

後奈良院

(六) 御着到百首和歌　三月三日

公條

立春　沖つ波けさ吹風に松山をこえてや春の空にたつらん
山霞　天つ空風吹たゆむ朝くもり山は霞そたちはしめける
竹鶯　春やとき竹のさ枝に今朝はしもおき出寒き鶯の声
野若菜　出てみる都の梢うちなひきみとりののへにつむわかな哉
春雪　おく山は春日もいつらなかしてふ芦の根しろき淡雪そふる
行路梅　立とまり人やりならぬ道ならはいきうしといはん梅の下陰
梅風　物にふれて聞に声ある風にたゝ梅かゝはかり身にしむはなし
柳露　ぬきとめん玉ともみへぬ露なれやかた糸による春の青柳
春雨　玉ほこの道のゆきゝに絶すたつ塵さへかすむ雨の暮哉
帰雁幽　雲のうちのいつく越路のさかひとか思ひもやらん帰る雁かね
春月　月や今霞の袖に入方の影しもあかぬ春の夜の空
寄雲花　山かくす雲はあやなし日影より匂ふと見ゆる花のひかりに
霞隔花　ぬきうすき名にこそたてれ花の色を霞の衣隔はつらん
雨中花　かひなしや花にそかこつとふ人も音せぬ雨を詠くらして
風前花　移ふやいつの人まそうしと思ふ風には花の心あはせて
花如雪　ちる花の木の下風はいかはかりさえてか空の雪とふるらん
苗代　せき入し水にまかせてつくるてふ民もひまある春の苗代
岸款冬　桜花岸うつ浪によりきつるはてや口なし咲る山ふき
松藤　あたにのみ咲散けりな藤花松にそかくる浪のぬれ衣
三月尽　おしめともたか手に引る梓弓やよひははやく空に暮けん

更衣　夏きてもあしたの程の風の色に花の袂をいかてかへまし
川卯花　山陰も月そなかるゝ川浪のよるのひかりにさける卯花
初郭公　ほのかにももらしそめつる初音よりおくある山のほとゝきす哉
郭公遍橘　いく里か月の影より鳴そめて雲もへたてぬ山ほとゝきす
蘆　折しあれはあかすみはしの桜にもつきて久しく匂ふ立花
薈菖蒲　しらぬまにかるてふ今日のあやめ草忍ふの軒のつまと社なれ
早苗　賤のおやはるけき秋のたのみをも手に取てしるさなへなるらん
五月雨　五月雨は雲まも見えぬ空の色に影うつす水もにこりはてぬる
夏月　おもほえす月は有明の行ゑまてさたかにみする夏のよの空
夏草　夏草もしけみは露の宿なから日影にたえすしほれてそ行
蚊遣火　一村の柳そふかき里はあれて春の煙を残すかやり火
窓螢　ならへてはいつかみるへき枝の雪をしらぬ螢の窓の光に
夕立　夕立は俄にのほるうき雲につゝみもあへぬ雨と社みれ
納涼　日の残る梢はしらし蟬の声涼しく暮る松の下風
六月祓　秋ははや空にもたつや水鳥のかもの川瀬のけふの御祓に
早秋　袖にのみ吹とはかりの秋の風今夜は身にもあまり涼しき
七夕　あまの川［　　］七夕の契りやふかき世ゝをへぬらん
深夜荻　露と夢いつれかむすふと斗やあたくらへする荻の上風
水辺萩　風吹は萩の錦の下水にたつかとみゆる水の白なみ
薄似袖　物思ふ心ならても露ふかき秋をお花か袖にみる哉
原虫　吹からに風のしのはら忍ひあまりよをへてしけき虫の声〻
鹿　つま恋の夜をかさねきて有明の影もやつらきさをしかの声
暁雲　故郷をしたふ涙の雨なから露よりいつるはつ雁のこゑ
鹿雁　露とたにをきてや色に出ぬへき心のそこの秋の夕暮
秋夕　相坂や駒ひきわたす月影に秋のなかはも杉の村立
駒迎　吹おろす風はまちかく身にしみて峰にまたるゝ月のはるけさ
峰月　明にけりよひ〳〵ことの空の月影をはとむる関守やなき
関月　常盤木は色なき杜の下草の露をや秋と月やとるらん
杜月　ひとり有千里の浪を行月に入ぬる磯のくまも残らす
磯月　月も空にはやともしひの明石潟風吹笘にかゝけてそみる
潟月

朝霧　軒端まて霧立のほる朝付日むかひの山の雲もひとつに
擣衣　声も今空に消けり衣うつ礒のうへの霜やそふらん
山紅葉　時雨つる山へさやかに夕日影さらにてらすや木ゝの紅葉ゝ
滝紅葉　紅葉ゝに滝のしら糸たちみたれ錦をたゝむ末の河波
暮秋　秋のうちはつれなき色もけふよりや忘かたみの松風の声
時雨　ほとなしと見しや時雨の夕付日さすかにはやくかたふきにけり
落葉　草葉みなかれ行まゝに埋れて木葉はかりの庭のさひしさ
残菊　いつまてかうつろふ秋の程なさを残りてみする白きくの花
寒草霜　かれわたる草の袂はをく霜をはらふはかりの風たにもなし
湊氷　うきねする衣手寒し湊風夜来かさねて今氷るらし
冬月　ちりまかふ四方の木葉の乱れきて月に晴たる峰の松風
枯葦　寒き江のかけあらはなる村芦のかれなてあまの住もはかなし
浦千鳥　空にたつ行ゑやはしる浦千鳥まさこの跡も波にかけしを
池水鳥　ねぬなはのくるれは氷る池水に夜床ををしの打わひて鳴
篠蔽　風さやく庭のをさゝの夜や寒きいやかたまれる蔽乱れて
夕鷹狩　はし鷹も暮ぬとかへる狩人の袖をねくらと頼てやゆく
里雪　我もゆき人にとはれん日をかへて里わく雪のあしたとも哉
庭雪　ちりふかき庭を嵐のよの程にはらひはてたる雪の上哉
炭電　日数ふる雪にこもれる炭かまの煙そ空の道もとめける
惜歳暮　おしめともほとなや梅をかさすより雪をみる迄年の暮ぬる
初恋　から衣袖はけふをそ初しほに染る涙や何の色なる
忍恋　枕たにしらしと思ふを軒に生る草はや何の露をみすらん
不逢恋　おもふこそ世〻の契を今更になきにや人のなしはてんとや
祈恋　たまさかにかはすはかりも一ことの神のしるしを頼むはかなさ
尋恋　なかめわひぬみちくるしほに鳴たつの忘れん方は雲のはるかに
聞恋　うき雲の心にかけて時鳥ゆくゑもしらすまとふ比哉
見恋　忘れはや霞にこめて山桜たくへんほとのおもかけもなし
契恋　くりかへし契る詞のあたにのみきゝならされてめつらしけなき
待恋　月やしる更行空も誰ゆへに恨はてにし我ならなくに
遇恋　行末をあひ思はすはあふ事の一夜は夢になりやはてなん

後朝恋　おき出し忘れ形見の朝霧は涙のうちにはらさてをみん
顕恋　うき名のみ風のうへにも立田山人や心の秋を見すらむ
偽恋　うらなくて何頼けんいにしへの我さへあたに思ふことのは
変恋　衣手や露のまゝなる月草のうつる心はめのまへにして
稀恋　たのみつる春夏過ぬ秋の空一夜はほしのあふ夜ある世を
久恋　神も又いかにへたてゝみつかきのむかしはかりの中となしけん
被厭恋　いつまてかたゝかた糸のいとはれて心ほそくも残る玉のを
被忘恋　汲そめし我そくやしきふかゝらぬ心はしるき忘井の水
絶恋　面影も忘るはかりの絶まにはたとりやせまし夢のうき橋
恨恋　芦のはの乱れてそ思ふ難波潟うらむるふしの絶ぬあまりに
寝覚鶏　聞もらす人やはあらんゆふつけの鳥はね覚のおりはへて鳴
古寺鐘　雲の波月の御舟の泊瀬山夜ふかき鐘に袖そうるほふ
名所松　月きよく風のひゝきも高砂の尾上の松は雲もかゝらす
山家　心せよなれ行まゝに山水のにこるもすむもひとつ流を
田家　色つかはかりにたにこんと斗を頼む山田の庵のさひしさ
羇中衣　たち出し涙かはかて旅衣日も夕露に野をや分まし
旅泊夢　故郷はいくへの関をへたつらん夢もとをらぬ草の枕に
思往事　なかれてもかへるとそ思ふ水茎の跡をしみれは残るむかしに
述懐　ともすれはわれと我身をありかほに世の人なみの物おもふらん
祝言　うこきなき山より出て長閑なる日影を君か世にあふく哉

(七) 着到百首和歌

立春　雪のうへも春くるけふの道しありと霞にけりな四方の山のは
朝霞　霞むより木のめはる風吹ぬらし野山のみとりけさはそひゆく
谷鶯　うち出る波をはしるや谷かけの氷にむせふうくひすのこゑ
残雪　消あへぬ春にそ思ふ雪の内をいかに過こし冬の山さと
若菜　朝日影わかなつむ野は霜とけてあらぬ露ちる袖の春風
里梅　花さかぬ里までにほふ梅かゝはいかに吹らんみねの春風
籬梅　ふりにける軒のしのふの秋風のけふも身にしむ梅かゝそする
春月　霞むよは行ともしらす更にけり見しや夕の山のはの月

春曙　幾たひもあかぬなかめや春のよの見はてぬ夢の明ほのゝ山
帰雁　ひきつれて帰る空には雁かねのしたふ別れもしらすかほなる
春雨　山は今朝霞むはかりの薄曇野へのみとりや春雨の空
岸柳　ゆく舟もこゝそとまりと春風の浪よせかへる岸の青柳
待花　春きても心の色をつくせとや人にまたれて花はさくらむ
初花　さくら花山のかひよりみえそめてけふこそ四方の春風のそら
見花　こしかたも身のゆく末も忘られて幾世を花となかめくらしつ
花盛　いかにみんたゝ一時の花さかり此夕風もさためなき世に
落花　空たかくみしやきのふの峰の雲ふもとは雪の花の夕かせ
款冬　残りなき春の日数を思ふにはさかり久しき山ふきの花
池藤　あしかもの青はにくるゝ春の色のさかりすくなき池の藤なみ
春暮　花ちりて春も今はの夕日影さすや岡辺の松もうらめし
更衣　かさねこし霞の衣たちかへてそをたにあらぬみねの白雲
卯花　すむ月の光をいそく卯花や此夕やみに折てかへらむ
待時鳥　時鳥同し雲ゐの声ならは月より後になとまたるらん
聞郭公　ほとゝきす花さく春につゝみこしことはりしらぬ声の色哉
郭公稀　時鳥まつとはかりの日数へておもひのはてそみな月の空
故郷橘　さくら咲春もむかしのふるさとゝしのへは更に匂ふたち花
早苗　うへわたす田面のさなへ水こえて秋をもまたぬ露そ乱るゝ
五月雨　明わたるけしきやいかに横雲もわかれぬ峰の五月雨の空
鵜川篝　心にもあらてやくたす鵜かひ舟はや瀬にうつるかゝり火の影
夏草　夏ふかき草はにましる村薄ほに出る影はとふ螢かな
夏月　花はたゝ秋なき時やと斗を契りてうつる庭の夏草
夕立　あちきなく見し程もなく明る夜の月にもおもふ空の浮雲
杜蟬　みるまゝにうつりも行か浮雲のたか心なる夕立の空
夏祓　下紅葉うちゝる杜の夕風に秋おもほゆる蟬のこゑ哉
早秋　みそき川行瀬涼しき水の面にあすより月の秋やちきらん
七夕　氷より春しりそめし谷風のまた声かへて秋はきにけり
荻風　行末のうきをはしらて七夕の一夜のための秋やまつらん
夢もまたいかにせよとか荻のはにむすほゝれ行秋風の声

萩露　真萩さく野守か庵の程なきにあらぬ露ちる軒の下風
女郎花　夕風になひくをみれは女郎花むすふもあたの花の下紐
夕虫　夕日影と山の末の紅をふり出てなく鈴虫のこゑ
夜鹿　よそにきく身にたに寒し秋風の暮る夜ことのさをしかの声
初雁　秋にたゝいとひはつへき空もなし今そこしちの雁も鳴なる
秋夕　それそとて人にかこたん色もなし心にこもる秋の夕くれ
山月　身にそしむふもとの雲の秋風にまたれてのほる山のはの月
野月　さそひゆく月に心のあくかれてちよもへぬへき野への秋哉
河月　渡し舟さしていくよの空の月すめるはしるや宇治の川長
江月　峰たかくみとりを遠くひたす江の空もひとつに澄る月哉
浦月　こく舟も月の都のさよ風にまかせてや行秋の浦人
籬菊　うつろふに色そふ菊を月草の同し笆の花と見ましや
擣衣　秋もまた更行まゝに寒きよを空にかさねてうつ衣哉
暁霧　有明のすむ影うすき沢水に鳴もたつなり秋霧の空
岡紅葉　嵐ふく岡のさゝ原をく露のよをへてふかき木ゝの紅葉ゝ
庭紅葉　秋やたゝ心にこもる思ひをもつゝみかねたる庭の紅葉ゝ
九月尽　大かたになれしはあたの秋の露けふの別れにたへむ袖かは
初冬　とはゝやなけふより冬の峰の雲雪けやいつこ松風の声
時雨　さためなくしくるゝ雲に暮やすき日影の内も猶そ短き
落葉　あはれまたたゝ一時に春秋の色をつくしてちる木葉哉
朝霜　明わたる空のけしきや出る日の影もくもらぬ霜の板橋
寒草　野へは今いつれを花の色とみんこけるからなる草のむら〳〵
千鳥　磯の松ねにあらはれて小夜千鳥しのふの浦の名をはしらすや
水鳥　白浪のうちもねぬよををしかもの思ひわひたる声の寒けさ
氷初結　今朝そみる芦間の水の薄氷いくよの霜のむすほゝるらん
冬月　霜雪をひかりにみかく空の月何にやとしていかにむかはん
鷹狩　かりくらし名残おほくもはし鷹の外山のおくに雉子鳴也
野霰　冬草のかれにし野への露ならてあらぬあられの玉そみたるゝ
浅雪　けさのまのさえし空より打ちりて日数にたへぬ庭の初雪
積雪　なかめつゝむなしき空に降雪のたかおもひよりつもりそふらん

閑中雪　小夜更てしつかに聞は窓の内にあはれまきれぬ雪の声哉
歳暮　けふそしる月をもめてしと斗のいさめし道に年の暮ぬる
寄月恋　思ふことまた出やらぬ月影のほのかにたにもいかてしらせん
寄雲恋　見すはいかにあたなる花の林まておもふ心にかゝる白くも
寄雨恋　袖のうへのたくひもかなし山風にうきたつ雲の雨になる空
寄露恋　しの薄忍ひし露をかことにて消ぬ命のうらみもそある
寄風恋　さりともと思ふ心に松の風きゝすてかたき床のさむしろ
寄山恋　祈りても逢瀬はしらすはつせ山身にしみかへる木からしの声
寄関恋　それとみよあるゝ関屋の板ひさし久しき恋に人めもる身を
寄海恋　はるかなる人の心のあら海は舟さしてたにいかにしるへき
寄原恋　年もへぬ人はつれなき色にしてうき身に遠きあふの松原
寄橋恋　うき名のみなかれてはやき河浪のたくひかなしきうちの橋姫
寄木恋　別れては後瀬の山の椎柴のかはらぬ色にたれをたのまん
寄草恋　たのみこし心もかなし野への色の草はいそく秋風を見て
寄鳥恋　立かへる又もあひみはきぬ〳〵に契りをくへき鳥の声哉
寄虫恋　うしつらしいはしなへての言のはにつきぬ思ひや夏虫のこゑ
寄獣恋　恨わひつれなき世とていとふ共身にそふ恋やましら鳴山
寄玉恋　さもあらぬ事をもきすにいひなして身はあら玉の年そへにける
寄鏡恋　うつろひし人にやならふ我涙むかふかゝみもあらすなりぬる
寄枕恋　此まゝにさてやゝみなんあはれそその見はてぬ夢の春の手枕
寄衣恋　から衣袖のわかれの今朝の露身にしみかへる恨とをしれ
寄糸恋　くりかへし思ふもはかなかた糸のよるの契は絶て久しき
浦松　雲のゐるうき島遠し浦風の松の葉わけにみゆる白なみ
窓竹　呉竹のよふかき雨の名残まて朝けの風の窓も露けき
山家嵐　小夜枕夢こそあらめ柴の庵も猶たへかたき山風の声
田家　せきいるゝ水音澄て小山田のかりほの庵そみるも淋しき
故郷　いつの世の柳桜の門ならん八重むくらせる露のふる郷
海路　うらやましうき世の浪の心をはかけてもしらぬあまの釣舟
羇旅　かねてよりおもひ定めぬかり枕さてもうちぬる陰は有けり
述懐　あすか川かねて浮世をしるとてもはかなかるへき昨日けふかな

神祇　てらせ猶さやけき月のみかさ山さして頼むも此世のみかは
祝言　数ならぬ身にたに思ふおもへたゝ道の道ある御代の行末

注、イ本にありて底本にない歌、述懐。

(八)　詠三十首和歌　永正九年月日道堅詠之公條卿

政為卿後日被詠之

公條

注　再昌草四三六ページに記事あり。閏四月の詠か。

待早鶯　〈イ朱（以下同ジ）朝日影たかきにうつれ鶯も花まちとをの梢なりとも
雨中紅梅　ふりかくす雪をはいとふ梅かえにゆるし色なるけさの雨かな
野遊　〈イ若草の霞にこもるつましあらは野をなつかしみ今夜あかさん
花勝前年　こそ見しもけふみる花の色香には忘れぬものゝ忘られやせん
藤繞庵　聞あかすよのまの雨の草の庵されはそ藤の浪もかゝれる
郭公留客　〈イ思ふとちかたらふよはの時鳥今一声やかへる□（さ歟）のそら
夏草漸滋　日にそへてとはれぬ人のをこたりもはらはてやみん庭の夏草
泉辺遇友　ともにいさ世のうきことも耳無の山下水に身をすましてん
深更荻　〈イ夢にのみいかゝかこたん小夜深き露は残らぬ荻の上かせ
野浅茅　かり（書）衣分行野への浅ちはらはらふもおなし露のうへ哉
秋夕感思　草木にも露をく比の夕ま暮袖たにもれぬ秋風そふく
月照水　〈（書）空の月おなし光にすむ水のいつれをやとる影にさためん
菊花暁香　月の入とを山風に夢覚てほしの光をみかくしら菊
霜蔵家　里やいつく夕付鳥も霜の下にむすひはてたる声の寒けさ
落葉満地　〈イ山路や梢まはらにもる月の落はかうへのかけを行哉
雪中歳暮　〈（書）松の雪つもるかうへにつもりきてけふ行としの心をそみる
憑不逢恋　〈（書）かはれかしあはれ恨もけふ幾日たのめしまゝの夕暮の空
恋不知恋　〈（書）身のほとを何かたとらん思ひのみしるへに恋の道をまかせて
卜恋　かひなしや人はつれなき思ひとてなけうつうらもうらみかほ成
片恋　いへはえに人もこたへすはてては又しのふにゝたる物おもひ哉
絶悔恋　今そしるつらきに絶ぬ心こそ末もとをらぬ契りなりけれ
竹為師　うへをきて色かへぬ窓の呉竹やまなふへき世のつねと頼まん
山館灯　山さとは内外へたてぬ松風になれていくよのともしひの影
田家興　又やみん門田のいなはは〳〵と色つきわたる秋のさかりは
相坂関鶏　別路のゆふつけ鳥よいかなれは今朝相坂の関になくらん
不破関杉　〈イ陰高き杉の梢に風寒て不破の関やはあられふるなり
白川関風　〈イ空にすむ光やいつく月影に風の吹しく白川の関
往事眇茫　〈イ過きつる世はかきりなしさても身のあすともしらぬ行末の空
述懐言尽　うきことをもうちなくさめて月日へぬ今更とはゝいかゝこたへん
心静延寿　〈イしつかなる心をしらは現にもあかぬよはひをしゐて契らん

合点十三首　私云点写本有九首

しつかなる心のまゝにまかはてや道をかしこき世ゝにつたへん
なれしにもあらすはかなき心をは見えてやいとゝあはれしられん

道堅上

注　底本に合点なく、イ本に九首あり。残りの四首は、書陵部蔵称名院公條集（伏一六九）により補った。
（書）はそれを示す。

(九)　三十首　永正十二年春　資直同時之詠

江上霞　かすみ行たなゝし小舟朝夕に同し入江も道やまよはん
野残雪　をのつから春の色をやわけてみん先雪消る野への草木に
竹裏鶯　嵐ふくふもとの竹のそよさらにさえかへる春の鶯の声
依風知梅　梅のはなに似たる物なき匂ひとは霞の外の風もしるらん
春曙月　いかにみん霞める色は夕暮の光なからにありあけの月
夕落花　夕日影山遠からし桜花ちりかひくもる鐘の声かな
河款冬　吉野川はやく過行春の色をいはてもしたふ山吹の花
雲間郭公　時鳥梢をうつむ白雲の空にまきれぬ声の色かな
庭夏草　その名をも花さく秋そわきてみんあたにはらふな庭の夏草
晩夏螢　涼しくも空に暮行夏の日の光たかくもとふほたる哉
荻驚夢　はかなしや荻のうへ吹秋の風露にあらそふ夢の面かけ
行路萩　まよはすや古枝の萩の花の色にわれふみ分んもとの通路

虫声滋　あたにちる露を涙の色〳〵にちくさなからの虫の声〻
峰初雁　なく雁よ峰の秋霧はれやらぬうき世としらは何かきつらん
故郷秋夕　秋の霧はらふもをくも夕暮の風のまゝにやあらぬ古郷
湖上月　月かすむ汀によするさゝ波も忘るはかりに氷る浦風
紅葉浅　立田川ふかきは水の心にて紅葉に秋の色そすくなき
時雨易過　たひ人の袖いかならし飛鳥の翅にかけて雲そしくるゝ
浦千鳥　身にそしむしほやくあまの袖の色に千鳥鳴たつ浦風の空
松上雪　明る夜の光もさむく山風の雪に声ある松の上哉
洩始恋　春にけふ袖の氷のとけかたき花の□色そみえてくやしき
待空恋　真木の戸のさすかなりける契りより又明はつる空たのめ哉
尋不逢恋　待みんに思ひよはれる人やありと猶も尋ねんみわの山本
忽別恋　逢瀬をはいそく心のむくひこそ此きぬ〳〵の限なりけれ
恨身恋　ことはりの心くらへの身なりせは我はわれとてうらみすも哉
関路雲　杉の葉も雲にとちたる関の戸の明る夜をそき相坂の山
山家夕煙　よそにみて夕は山に入雲やわかすむ庵のけふりなるらん
草庵雨　花の時を思ひ出ては草の庵に聞もかなしき雨風の声
旅宿夢　かり枕かへる夢のみしたはれてあはれ定めぬ身の行ゑ哉
寄道祝　たゝしきを治れる世の例そと思ふにふかき敷島の道

(十)　三十首和歌　資直道堅両人詠之後日被和之

公條

早春鶯　うちとくる氷を出て春風の声にみちある谷のうくひす
朝霞　霜雪の空よりも猶出る日の影は霞によはき色哉
夕梅　梅かゝのやみはあやなき思ひまてかねて身にしむ夕月の影
庭春雨　ふるとしも空には見えぬ春雨の色あらはなる庭の若草
見花　さくもたゝあかぬ思ひに年ふりてまたみぬものは花盛哉
聞郭公　鳴すてし名残よいかに時鳥まつ夜は夢も有けるものを
五月雨久　月のうへにいく夜思ひのつもりけん雨ならすとも五月雨の空
水辺螢　なかれては螢も幾夜水の淡のうたかた消ぬ身をくたくらん
遠夕立　ほともなく嶺こす雲の風をいたみ思はぬかたや夕立の空
樹陰納涼　住かへて一木の陰を頼む哉朝夕すゝみこなたかなたに
草花露　露の玉萩の錦も終に又此世のものと秋風そふく
霧中雁　明わたる山もと遠しくる雁の羽風になひく薄霧の空
野鹿　さをしかのふかき思ひや野への露花のちくさの色にいつらん
深夜月　おき出て見れは夜ふかし月影の霜のそこなる鵲のはし
山紅葉　時雨つる雲吹はらふ風のまも心ゆるさぬみねの紅葉ゝ
初冬時雨　秋風の木のはにくもる空にけふ時雨や冬の道もとめけん
川氷　けさも猶むすふ氷やよはの月影見し水に残る川かせ
連日雪　かりそめと思ひし物を日数のみつもれは雪も払ふかたなき
浦千鳥　さえくらす浪の声〻浦風の思ひをくたく小夜千鳥哉
夜神楽　空に猶名残や思ふふかきよの雲にはあけぬあかほしの声
忍恋　おほけなく我のみ何につゝむらん思はぬとのはもらしもそする
不逢恋　さり共と頼むや契りかた糸のよはき物からゆらく玉のを
待恋　月をのみいくよ待出つ同しよに住そとはかり打なかめつゝ
遇不逢恋　逢見しを夢にしなさはせめて身の枕定めん方ををしへよ
恨恋　ことはりは我身にのみと定め置てたゝ一方にうらみつる哉
暁雲　見すてゝは夜ふかきとてもいかゝねん横雲かゝる有明の山
夜夢　身のうへに過にし方よみる夢の跡なきものゝたくひこそあれ
羇中灯　ともしひの影もめつらしうちもねす月を見し野へ枕かはらて
山家嵐　夜嵐に身をまかせたる山のおくとすれは袖に露こほるらん
社頭祝　春日山さかふる色はそれなからむかしにかへれ北の藤浪

注、イ本にない歌、恨恋。

(十一)　多武峰談山明神法楽和歌

冬日陪　多武峰社詠三十首和歌

権イ正二位行権大納言兼太宰帥公條

連峰霞　きのふけふ春の光は遠近の嶺たちならす朝かすみ哉
松間鶯　うくひすや今一しほの春かけてなけとも寒き松風の声

梅　たくひありと池の鏡にをし鳥のかけをならふる梅の初花
浮　水　咲そへは雲と見し名は空にたつちりの外なる山さくら哉
静　見　花　かすみつる有明の月も弓張のやよひの空はいつち成らん
暮　春　月　つれなしと見すてし月の曙に思ひよはるやなくほとゝきす
暁　郭　公　暮るまてちかき門田は帰るさをいそかていそきとるさなへかな
夕　早　苗　思ひたゝけたん物ともしら浪に光なかれてゆくほたるかな
水　辺　螢　よそまても涼しき影を峰に生る松より落る夕立の雲
峰　夕　立　水のうへさすか夕はさす舟のまほならねとも袖の涼しさ
船　納　涼　風にちるちくさのうへを花薄おほふ袖とはいかゝ頼まん
薄　似　袖　もとあらの萩のためとやくる雁の羽風もそひて露こほれけり
初　聞　雁　よひのまのくまにかこちてすむ月を心短くたれ見捨けん
深　夜　月　幾ちたひうちしきりてかから衣さすかにたのむあかつきの声
擣　衣　幽　あすはいかゝ袖にこき入てくる人に山の錦の色そゆかしき
山　紅　葉　程もなく時雨は空に杉のはの露ほしあへす遠き日の影
時　雨　過　かれ〳〵の冬には何かしのふ草軒端も庭も霜むすふ比
寒　草　霜　うちゝるも霰は霜をみかきてや笹のくま〳〵光みすらん
篠　上　霰　山川の氷りもやらす落かへり声をあらそふさよちとり哉
河　千　鳥　かへり行夕の寺の霜のうへに色もまかはぬ墨染の袖
古　寺　雪　窓の内のゆかしきのみの思ひにも袖はくるしきけふの面影
僅　見　恋　神かきにかけし心のみしめ縄つれなき中にくちんとやする
久　祈　恋　見し夢にかへす衣のなれかほにけふの逢瀬を思ふはかなさ
稀　逢　恋　あはれけにことのみよきにすかされて恨ところも又や忘れん
恨　偽　恋　つれなしや身は住吉の岸に生る草の名のみか松ふりにけり
被　忘　恋　山ふかき宿の梢をこれとたに折てみせはや雲の一えた
山　家　雲　朽木とも岩とも見えす緑なる苔を渡せるそはのかけはし
橋　上　苔　雨により日をやをくらん一夜たに明しかねたる枕ならすは
旅　宿　雨　夢うつゝ思ひしほるゝ昔をは草木もしるや暁のかね
暁　懐　旧　おさまれる四方の国をも四所の跡たるゝ神に猶祈らん
社　頭　祝

(十) 詠三十首和歌

右大臣公條

立　春　出る日もけふあら玉の男山さかゆく春の光さやけし
雪　中　鶯　梅のはなそれともわかぬ雪の中に鳴て春しる野への鶯
山　霞　山は今朝ふもとのちりのむらさきの霞の衣かさねてやたつ
霞　中　滝　黒き筋のましるとは見ぬ滝の糸のいかて霞をわきて落らん
暁　帰　雁　折しもあれ名残おほくも帰る雁春をはおのかあかつきにして
尋　花　花　さきて花またるゝまてになさしとていそくはしるや春の山道
雲　をしなへて木のめはるふる雨により猶立さらぬ花の白くも
苅　菖　蒲　かりとるや露のかす〳〵あやめ草都の軒端かきりしられし
納　涼　山ふかくしけるまゝにやさき草の三葉四葉の内の涼しさ
夕　螢　空はまた峰こす月の夕やみの光をちらしとふほたるかな
七　夕　いつなれて年の一夜の天河たとらすわたる星あひの空
河　上　霧　遠方やたえす流し淀川のよとむとみるは朝きりのそら
月　前　霧　月の中の桂の枝の光もやわきて木草の露にうつれる
野　径　月　しらぬ野ゝ月に色つく浅ち原しめさして行秋の通路
暁　鹿　立かへり嶺の横雲つれなくて松ふく風にをしか鳴也
水　辺　菊　河水の黄なる花さく菊の上に千年すむてふ秋契るらし
暮　秋　虫　露霜のふりはへ今や行秋をしたふに似たるすゝむしの声
朝　雪　朝きよめ雪の光に玉はゝき何をはらはん庭としもなし
故　郷　雪　行雲は絶す時雨のふりをけるならのみやこそ雪に晴たる
湖　辺　雪　浦風の汀によせしさゝ波のこほりはてゝや雪とふるらん
初　恋　うちつけに見えむ心ははつかしのもりなんことのかねてくやしき
不　逢　恋　もろともにあひ思ふたに忍ふれは稀なるものを何へたつらん
厭　恋　人は山われはうき世になしはてゝいとひかほにもへたてはつらん
稀　問　恋　ゆるさねは心のまゝにあらぬ身を忘草生る道とみるらし
見　増　恋　おもかけを見しはしはしのなくさみと思ふはつゐの思ひ也けり
片　恋　とけやすきためしに聞し片結ひ同し心にあらぬ下ひも

絶久恋　聞しらぬ人にたちてし琴のをゝ玉の緒にして年をへよとや
海眺望　隔なき遠きたよりも待そみんにはよき空にいつる釣舟
薄暮松風　暮わたる入日ををくる声はして月をいつくに松風の声
祝言　神やまつ国をまもるをさきとしてよゝにとや思ふ君か行末

(十三) 詠三十首和歌

公條

香具山立春　雪なからけさ榊はのかく山をとめて道ある春やたつらん
三輪山霞　いつれとかしるしの杉もみわの山同しかさしに霞たつ空
春日野鶯　谷を出てうつる心やかすか野に道しるへするうくひすのこゑ
難波津梅　難波津やみちくるしほに梅咲て世に匂ふへき春風そ吹
吉野山桜　春のきて桜も雪のふる郷に吉野は冬の外やなからん
志賀花園蝶　咲しより志賀の花園とひかよふ胡蝶も夢の昔をや思ふ
住江藤　住江や絶すも岸による声の色に出たる松の藤なみ
筑波山新樹　朝露の木ゝはみとりもにゐはりのつくはの山は雲もかゝらす
音羽山郭公　雲うつむ梢はるかに時鳥音羽のやまの声ほのかなり
遠里小野夏草　花さかん真萩かりませ秋はまた遠里小野を分るあけまき
大井川鵜舟　うふねさすかゝりの跡も大ゐ川かはへの松のうちけふりつゝ
篠田杜納涼　涼しさは手にむすふて泉なる信太の杜の陰にくらさん
宮城野萩　はきか花染色ならは宮城野の露のかきりはいかゝ咲へき
鳥羽田雁　いく秋をかけてかきかん色つける鳥羽田の稲を雁の一行
小倉山鹿　立ならす秋もいく世の小倉山鹿のおもひも霧のふかさも
玉津島月　月すめは磯のまなこも玉津島みかく光は空もへたてし
須磨浦月　秋風も関吹こえて隔なき月をそよする須磨の浦浪
吹上浜菊　天つ星あやまつ菊の色よりや波も吹上に匂ふ白きく
竜田川紅葉　わたるせをいかゝ定めん立田川ふかき紅葉の色にまかせて
伊駒山時雨　きのふけふわきて立ぬる雲やます時雨折しるいこま山哉
三島江寒芦　波風にみしますかゝさかたふけて芦かり小舟入江寒けき
佐保川千鳥　ゐるたつのひとりねかたきさほ川の思ひやかはすさよ千鳥鳴
相坂山雪　相坂は雪の色より鳴出てゆふつけ鳥や関路もるらん
宇治川網代　さ莚にあらそふ心武士の八十うち川にみるもはかなき
泊瀬山鐘　はつせ山鐘きく枕たれありてその暁に二本のすき
明石浦舟　夕日影あかしの浦に島かくれおもひし舟の帰るをそみる
佐夜中山旅　たひ衣かたらふ人をいさやともさやの中山いかゝたのまん
海橋立松　久かたのあまのはしにてはしたてゝをよふや松のみとり成らん
伏見里竹　ほしかねつ涙に染しくれ竹の伏見の里をよゝの名残に
和歌浦鶴　仙人の老をかへしてわかの浦に住てふたつや君か代のため

(十四) 二十首和歌　永正十二年閏二月廿八日　於石山成就院詠作両吟

江上霞　朝ほらけ霞む入江の波の上に跡つき初て出るふな人　公條
野鶯　雪はまたふるすなからの谷の戸をあくかれ出る野への鶯　尊海
山残雪　ふる雪は消ぬ物から春の色にかすめは遠きひらの山風　公條
梅薫袖　袖の上よこはよにしらぬ匂ひ哉さやはうつろふ梅の下風　尊海
春暁月　うたゝねの枕なからに春の夜の夢もみしかく明る月影　公條
遠尋花　いくへともいさしら雪を咲花の匂ひにたとる春の山ふみ　尊海
花盛開　うつろふは心つからの色かをもけふよりしらん花盛かな　公條
花随風　なひかぬもたくひある世を春の風はなのいかなるあたし心そ　尊海
岡雉　朝霜のをかの雉子の声〳〵に行袖寒し花の白雪　公條
暮春藤　恨あれや藤のしなひの永き日もあはれ今はの春の別路　尊海
不逢恋　草枕かりふく芦のふしのまも逢みぬ中は夢も絶けり　公條
祈恋　みしめ縄心なかくもしらゆふの手向のするになひかさらめや　尊海
契待恋　身こそあれ契る夕のあはれをは忘れし物をいかにふけゝむ　公條
逢増恋　俤もかはり行まてますかゝみおもへは何に逢見初けん　尊海
惜別恋　いかにせん身はさためなし人はまたかはる心もしらふ別ち　公條
立名恋　にくからぬ人ゆへならは白雲の空にたつ名もよしやいとはし　尊海
恨恋　おもひのみつもるたくひはしは舟の恨ていくか行かへるらん　公條

関路鶏　明わたる花の光に関の戸はまた夜ふかきを鳥の声哉　尊海
浦松　しかの浦や松は一木の春の色を千里の浪の緑にそみる　公條
寄道祝　終に世にみちく（イ）たらんすへらきの君か君たる道のはしめは　尊海

(壱) 十首和歌　永正十年正月一日試筆

処〻立春　行末にさけるさかさる花はいさ里をはわかしけふのはる風
遠山霞薄　消なくに雪の光やましるらん明かたうすくかすむ山の端
水辺残雪　山川は消あへぬ雪の下水になと色ふかき末のしらなみ
梅近聞鶯　野へちかき家ゐならぬも咲梅に心へたてぬうくひすの声
柳先花緑　春風の吹やみとりの空の色は花よりさきの青柳のいと
忍尋縁恋　人はいさたれにかわきて忍ふやとたよりより先さてやまよはん
人伝恨恋　つたへつる人もわりなし思ふへきことは残さすうらみやりても
山家客来　こと更に我宿をのみ問人に思へはあさき山のおくかな
飛滝音清　空よりやあまのかはらに吹風の声をもおとす峰の滝つせ
霜鶴立洲　いくよまて月の光もなかれすにはらはぬ霜のつるの毛衣

(弐) 十首和歌

嶺上霞　春の色に嶺の嵐のたゆむよりふもとをこめてたつ霞哉
余寒月　猶寒る外山の雪を吹たてゝ月に霞まぬ春風の空
梅薫風　春風は色かのなきを心にて咲より梅ををのかものなる
帰雁幽　なかめやる声の中にもかすみつゝかへりみもせぬ春の雁かね
山家花　物そ思ふつま木こるへき宿も猶花の外にと今はもとめん
契久恋　人しれすかそふれは又年月の涙にそへて身のみふりぬる
不逢恋　思ふにも逢瀬はかたき世なりけりさりとて恋の身をいかにせん
朝眺望　山はなお雪の光の朝ほらけ波まにきゆるはるの雁かね
旅宿夢　いつくにもよしや一夜はあかしてよ見はてん夢の枕やはある（すイ）
独述懐　人のうへを見きくにも猶ありて世のさためかたきは身の行ゑ哉（にイ）

(壱) 今日御賀をせさせ給ふよろこひのあまり歌十首よみてたてまつる

権中納言為益

注　（　）内の傍注は、群書類従本第五三〇（第二十九輯）との校異をあらわす。

あやめ草ひきみる程も近（なへ）けれはねなかきよはひけふにそ有ける
松高みみきりの竹も陰（覆）しるく千世はこもれる宿にも有哉
かそへしるしるしをよゝに思れは国につえつくはしめ成らん
嬉しさをけふみるほとはことに出ていふにもあまる物にそ有ける（そ有けるイ）
是も又かそふるまゝにいつとなき人のよはひもしるくなるなれ
なかゝれと人の玉のを玉はゝきとる手はかりも先いはふかな（かな）
ふかく入て道をもとむる程もたゝためしまれなるしるへとや思ふ
あしわかのわかの浦はに住たつのへぬへき□（年の行ゑしらすも）のよはひしらるゝ（ちよイ）
もろともによはひをけふはかそへ（覆）きて猶百年も人はへぬへし
いはふとてやまとことのはかたはかり思ふかことは筆に見えぬる（おかことはイ）（はのイ）

凡賀といへることは其年のみてるを賀し行末の遐算を祈るとかやすへらきの御賀は淳和仁明よりはしまりそれよりしてたゝ人にもつねのことなりなかに仁和の御門遍昭にとにもかくにもとの製作ありまことに世すて人（ま）にても其徳によれるにや（とイ）されは五条入道三品も其跡をおほしめして九十賀（かイ）（ナシ）給へり花山のあとをたつぬる雪のうちなと黄門の詠し給へり千歳（るイ）の美談ともなれるこゝに九条博陸入道殿下野僧かおしけなき身にしも懸車の年をかそへ（ず）給て人〻をあつめ七十首の歌をよませ講頌せしめ並（譽）莚をのへ羽觴を飛してひねもすに老をわすれ歓をつくせるに冷泉黄門十首の詠歌を袖にしておはしたりまめやかにかの三品の齢たかく徳ひろき苗裔としてかくはかりの褒詞とも数ならぬ身にはあまりなるまておほえて筆にまかせけり（たイ）

なかきねも我とはいかてしらぬまに引人そしるあやめ成らし
呉竹の世のうきふしも今はなし砌の松は枝そくちぬる
はつかしや世のたすけにもあらぬ身の国に杖つく姿あやしき
嬉しさやあはすはけふはと斗の老の涙はとにもかくにも
いつのまに命なかゝるためしにはひかるゝまての身とは成けん
老そうき身のいにしへは玉はゝき手にとることも忘れはてぬる
終に身にもとむるはたゝ法の門入たゝてこそ猶まよひけれ
ましつゝ鳴あしたつよあしわかの浦には老の波はかけすや
なからへて今百年も三十の輪のめくるほとなき身はあはれ也
つきもせしけふのなさけの数〳〵は浜の真砂の大和ことのは

仍覚

(六)

六首　夢庵追善

夢　音になくもあはれいつまて空蟬の世をはなへての夢とみる〳〵
幻　梅かゝにかへらん玉のありかをもさしてしるへきまほろしも哉
泡　なかれてはけにかへりこぬ水の泡のあはれとまらぬ行ゑ悲しき
影　たくひなき心をしれは俤のうつすを見ても涙落けり
露　うへ置し庭の草木にかけてみん露のことのは数ならすとも
電　めのまへの光のみにていなつまの跡とふかたもなき霜路哉

(九)

冬日陪北野社詠三十首和歌

従二位権大納言兼太宰権帥藤原朝臣公條

早春霞　四方の空長閑に成て嶺の雪消るとやいはん霞むとやいはん
沢春草　あさりする沢辺のたつも若草の緑に老をかへすとそみる
暁　梅　夕やみはあやなしと思ふ梅花待えて匂ふあかつきのそら
花満山　分いれはやかて花なる山風にみねの桜をとふ人やなき
江上暮春　かへるさを忘るゝ草も住江にありやとしたふ春の行末
浜卯花　ふかき谷もあさく見えけり月影のさし入はかりさける卯花
野郭公　行末は雲もかゝりてひろき野を山路とや思ふなく郭公
雨後鵜川　明てしもしはしは雨の名残ある雲もやひかり鵜舟さす影
月前荻　月の夜はうちもねられす荻のはも更にやしけき秋風の声
夕虫　夕暮を思ひわひたる虫の音に露置そむるはしとそみる
海辺鹿　つまこふる秋の思ひはさをしかの山よりもなを海へにやなく
閑庭薄　世のうさを思ひのこさぬ淋しさに庭の尾花もほにや出けん
名所擣衣　ひとりあるすさみとや打から衣たかかたしきのうちの河風
朝寒芦　風そよくかれ葉なからに朝霜の又ほに出るあしの村立
深夜千鳥　更ゆけは結ふ氷に川音もしつかになりて千鳥なく也
故郷雪　故郷はあるしなしとて消ぬへき春を忘るな庭の白雪
聞声恋　俤はほのかなりとも夢にみん声はかりはかなきはなし
稀恋　徒に落る涙の玉しきていく夜かひなく君か来まさぬ
増恋　年月の心の色のみへはこそ思ひますてふ程もしられめ
怨恋　思ふをもけふの恨の数ほとはいはて過しそ更にくやしき
被忘恋　世をへては我や忘るゝ人や又思ひ出るとたのむはかなさ
旅行　故郷の忘れかたさは行〳〵も野山につけて猶そこひける
旅泊　そをたにも友とみよとや浪枕むへも心あるあまの漁火
旅宿　とけてねぬ草の枕の明る夜はいはふる駒の声にしるしも
山家松　山ふかきわかあらましの末の松あたし心の浪やこえなん
山家橋　我もいてし人もとはしと住山に打わたす橋は中絶ぬへし
山家苔　世にかへる心の道は苔の上にあとも見えしとなれる山かな
寄神祇祝　今よりときのふの恨あらためし神のまもりそ世ゝにかしこき
寄水懐旧　落とまりむかしの道も残るやととはまほしきは水茎のあと
寄雲述懐　心あらはたゝ此西に行月にしはしもかけそ雲の浮橋

＊　助教授　一般教科
＊＊　講　師　一般教科

昭和四十一年十二月十四日受理